

(c) 佐久地方に主体的な分布域をもつ土器群 (189~192)

出土量は極めて少ない。加曾利E式土器に特有な口縁部文様及び胴部分割懸垂文をもつものの、地文には唐草文系土器にみられる鱗状の短沈線や重層する直線的な短沈線を充填する。190については唐草文系土器に含まれる可能性も残す。

(d) 曾利系土器を一括する (193~199)

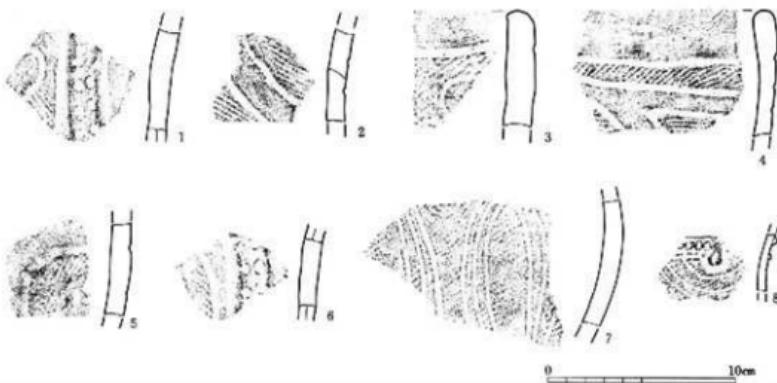
曾利式土器は八ヶ岳西・南麓から山梨県域を中心に分布が知られているが、ここで検出された土器は、それら曾利式土器が一旦関東地方に波及して加曾利E式土器分布圏に取り込まれた後に、中期末における加曾利E式土器の中部地方への流入に際して一緒に入ってきたものと考えられる。文様・モチーフにおいて加曾利E式土器の影響が看取される。193・194は口縁部破片、他は胴部破片であるが、195・197・198に端的な「ハ」の字状の短沈線による地文を特徴とする。出土量は比較的少ない。

#### (4) 後期の遺物

当該期の遺構は存在しない。微量の土器片が出土しただけだが、そのすべてを図示した。

1~6は称名寺式土器に比定される。2本一組の平行沈線文間に繩文を充填し、帯状のモチーフを描く。1・6は平行隆起線文を伴う。3は称名寺I式の古い段階に位置づけられようか。

7・8は堀之内式土器。ともに夔形を呈するものであろう。7は繩文を地文として対向する多条の弧状沈線文が施される。8は頸部にキザミのある細い隆線をめぐらすもので、「8」の字状の貼付け文が加えられる。貼付け文下には上弦の弧状を描く磨消繩文が施文される。薄手で堅緻なつくりの土器である。



第88図 繩文時代後期の出土土器拓影

## (5) 晩期末葉前後の遺構と遺物

遺構・遺物ともに微量である。遺構は、上坑4基・埋甕1基を検出した。調査区中央東寄りのところに集中しており、遺構外出土遺物も概ね分布域を等しくしていた。出土土器は、在来の浮線文系土器が主体をなし、条痕文系土器は第90図-3の1点に限られる。またその他に、縄文を施すもの(第94図-31)が1点出土している。浅鉢・鉢(?)・甕・深鉢・壺等をみると、器形と整形を知りえるものの多数は課題の多い甕であることから、細かな時期を確定できるものではない。が、多くは「氷I式」及びその後型式の要素を具備するものであるため、晩期末葉前後として扱う。なお、遺構内より石器の伴出をみたが、中期末葉のものも少なからず含まれるものと考えられる。



第89図 縄文時代晩期末葉前後の遺構配置図

### ① 土坑 (第90-92図)

#### 34号土坑

かー8グリッドに位置する。径90cm前後の円形を呈し、深さは約32cmを測る。ロームブロックを含まない暗褐色土が堆積していた。遺物を提示していないが、細密条痕を施す土器小片が数点出土している。

#### 45号土坑

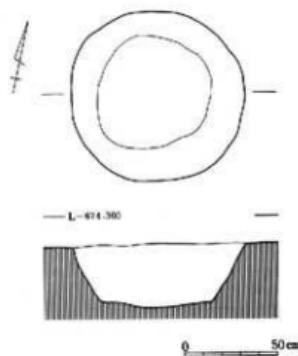
くー10グリッドに位置し、東半は調査区外に及んでいる。方形を呈するものであろうか。深さは最大で38cmを測る。覆土中層に大小の礫を含むが、最も大きいものは割り石であった。

遺物は、覆土中より散在して出土した。1は口縁部4カ所に小穴起を有する小形の甕。肩部以下に最大径を有する。肩部の張りは緩やかで、整形によるものと考えられる。2は細密条痕を施す甕の胴部破片。3は唯一の条痕文系土器である。貝殻条痕に近似するが、原体は貝殻でないらしい。粗粒の石英・長石を含み、色調と併せていわゆる「東海系胎土」の特徴を示している。4は黒曜石製の剥片石器である。

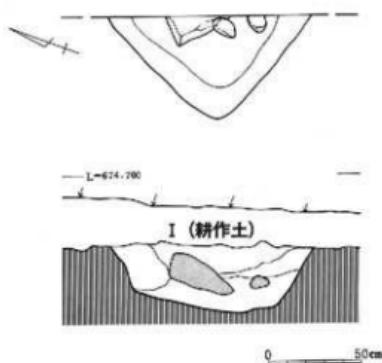
#### 47号土坑

く・けー6・7グリッドに位置する。径1.5~1.6m、深さ95cmを測る大形のもである。円形を

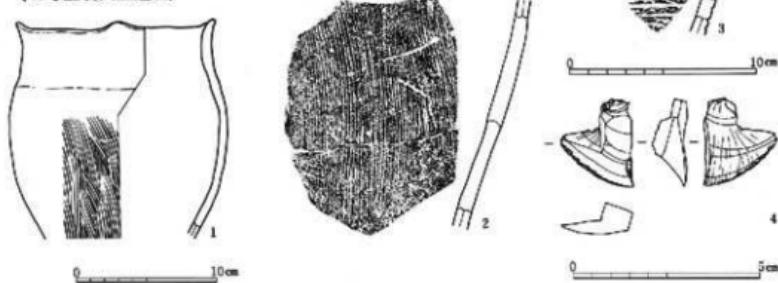
〈34号土坑〉



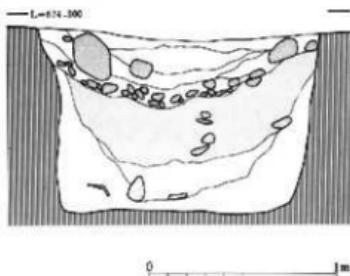
〈45号土坑〉



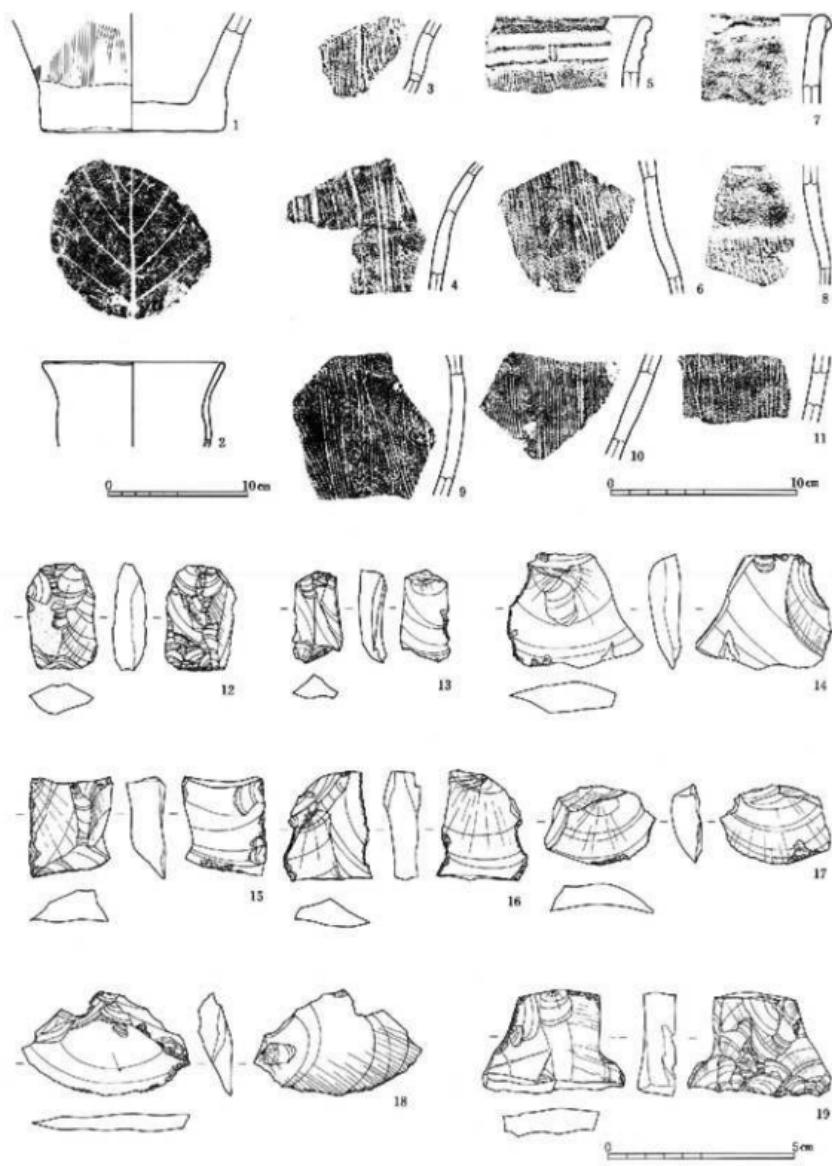
〈45号土坑出土遺物〉



〈47号土坑〉

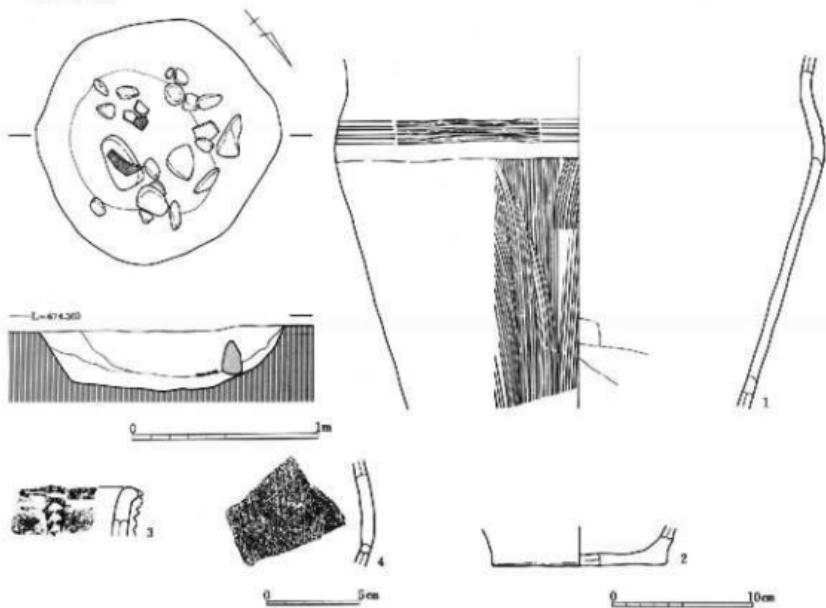


第90図 縄文時代晩期末葉前後の土坑実測図及び出土遺物実測図・拓影

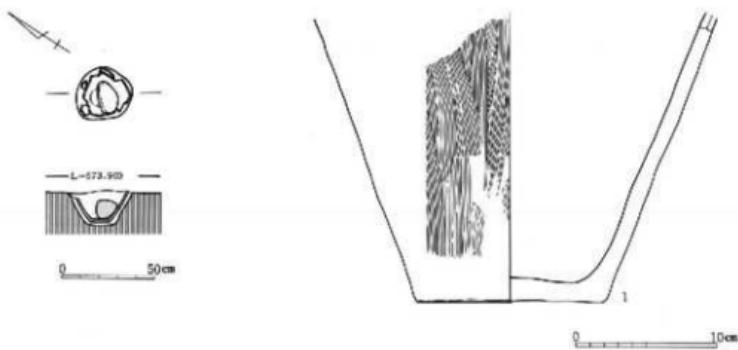


第91図 47号土坑出土遺物実測図及び拓影

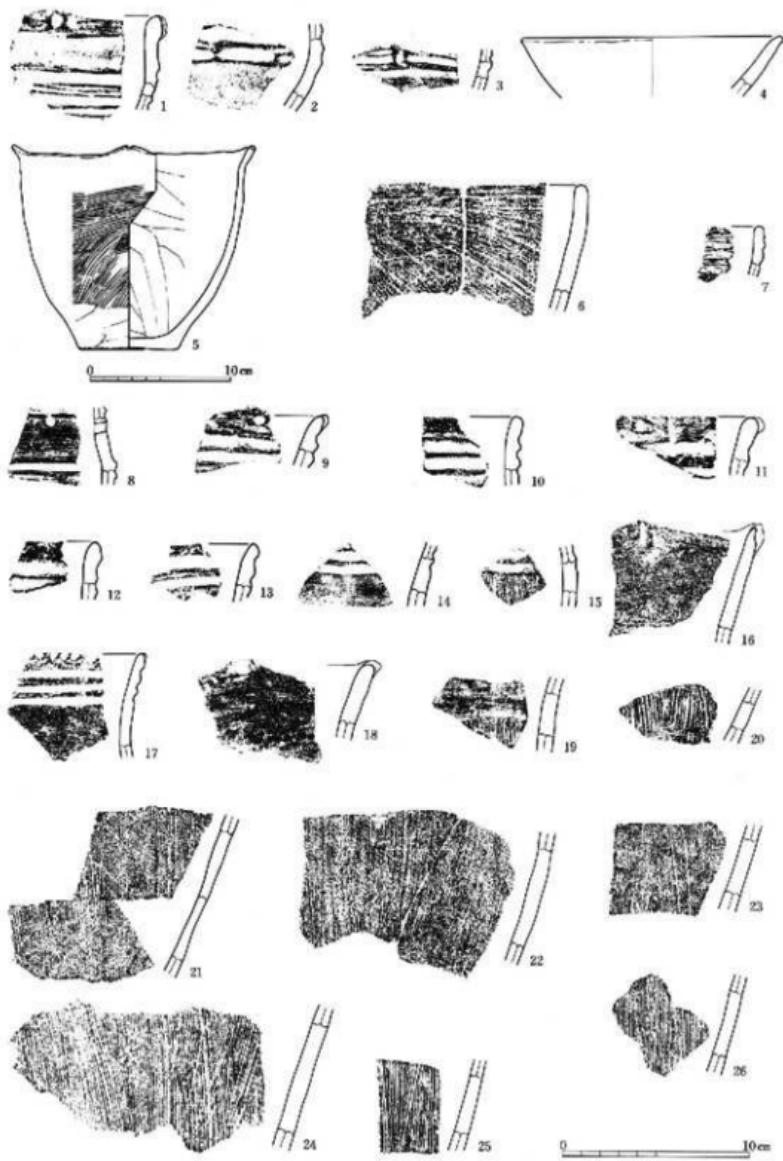
〈64号土坑〉



〈3号埋甕〉



第92図 縄文時代晩期末葉前後の遺構実測図及び出土土器実測図・拓影



第93図 純文時代晩期末葉前後の遺構外出土土器実測図及び拓影(1)



第94図 開文時代晩期末葉前後の遺構外出土土器拓影(2)

呈す。覆土は三角堆積を基本とするが、中層にロームブロック主体上が厚く堆積し(断面アミ部)、その直上に多量の礫が認められた。

遺物は、ロームブロック主体土を挟んでその上下から散在して出土した。1は木葉痕のある甕の底部。2は肩の張りが明瞭でないが、小形の甕に類するものか。3・4は深鉢の頸部破片。5・6は口頸部にも細密条痕を施すもの。5の口縁部破片は隆線により施文されるが、文様内にミガキは加えられない。左端に圧痕付小突起をかすかに認める。7は口縁端部外側を肥厚させ、圧痕付小突起を付す無文の甕。8~10は甕の肩部及び胴部破片。石器は小形石器及びその石核を得てある。すべて黒曜石を用いている。12がピエス・エスキュー、13~18が剝片石器、19が石核である。

#### 64号土坑

かー8グリッドに位置する。径1.3m前後の円形を呈し、深さは最高で33cmを測る。3層に分層可能だったが、ロームブロックの混入はない。上層に礫及び土器が含まれていた。

1は肩部に文様をもつ甕。文様内にミガキは認められない。底部破片の2と同一個体の可能性がある。3は口外帶及び縦位施文を有する甕。4も甕の胴部破片と考えられる。

#### ② 埋甕 (第92図)

#### 3号埋甕

けー10グリッドに位置する。比較的大形の甕を正位に埋設したものである。ローム上面まで耕作が及んでいることから底部付近のみが遺存している。

#### ③ 遺構外出土遺物 (第93・94図)

当該期特有の石器は出土していない。ここでは土器のみを扱う。土器には浅鉢・鉢・深鉢・甕、その他の器種がある。

1~3が浅鉢。提示したもの以外は出土していない。いずれも浮線網状文を施すもので、ミガキもていねいに行われている。

4が鉢。内外面ともミガキを加えているが、外面は先にヨコ方向の条痕が施されている。

5~7が深鉢。5・7が大形、6が小形になるらしい。7は、いわゆる「非彫刻的な沈線」を

施するもの。なお、5は中期木葉の23号住居址の覆土中から出土したものであり、本米はなんらかの遺構に帰属していたものと考えられる。

8~19は甕の口縁部及び口頭部。18~19を除き隆線ないし沈線帯を有し、内、8・15は肩部にも文様を付するものである。また17は口唇端部を水平に面取りし、外側に連続したキザミ目を施す。その直下は「非彫刻的な沈線」が入る。20~26は縦位の細密条痕を施すもので、多くは甕の胴部破片と考えられる。

27~30は、条間のやや粗い細密条痕を斜位ないし横位に施したもので、深鉢か壺の破片である可能性が高い。

31は球胸を呈する小形の土器のようだが、節目の細かい単節縄文を施している。在来の土器ではなく、あるいは東北地方に系するものであろうか。

第5表縄文時代晩期末葉前後の石器観察表

図-Na	出土遺構	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
90-4	45号土坑	剥片石器	I b	2.4	1.9	0.9	2.1	完	形 無縫石
91-12	47号土坑	ビエス		2.9	1.9	0.9	4.9	"	"
-13	"	剥片石器	I b	2.5	1.4	0.8	2.0	"	"
-14	"	"	"	3.1	3.7	0.9	7.7	"	"
-15	"	"	"	2.7	2.2	1.0	5.5	"	"
-16	"	"	"	2.9	2.3	1.0	4.3	"	"
-17	"	"	II b	2.1	2.9	0.8	3.2	"	"
-18	"	"	"	2.8	4.5	0.9	6.8	"	"
-19	"	石核	III	2.7	3.8	1.0	9.3	"	"

## (6) 時期不明の遺構と遺物

縄文時代の所産であることは確かでも、時期の帰属が不明なものをここに一括した。内容は、炉址1基と遺構外から出土した石器である。

### ① 1号炉址 (第96回)

お~3グリッドに位置する。一边約42cm、深さ約15cmと小形で、四方に偏平な自然縁を配している。火床は焼けていなかったが、わずかに礎内面に煤の付着を看取した。石囲炉とすべきだろう。検出当初、住居の存在を想定したが、削平を受けない箇所であるのにもかかわらず、壁・床を始めとして付属する施設を何ら確認できなかった。屋外に設けられたものであろうか。また、遺物の出土をみないことと時期不明とせざるを得ないが、その規模・構造から察して少なくとも中期以前の所産ではなきそうだ。晩期の産物か。



第95図 縄文時代の時期不明遺構配置図

片石器、ビエス・エスキュー、石核、打・磨製石斧、礫石器、磨石、凹石、蜂の巣石等で構成されている。内、40%程度を図化した。

#### ア 石鎌

53点出土しており、未製品と思われるものが3点含まれる。内、41点を図化した。形態の推定できるものは44点で、無茎凹基鎌（34点）をI、無茎平基鎌（3点）をII、円基鎌（4点）をIII、尖基鎌（3点）をIVとした。すべて無茎である。

Iは抉りの深いものから、抉りがわずかでIIとの区別が微妙なものまでバラエティーに富む。また、肩に棱をもつものや、側縁に強く丸みをもったものも認められる。IIは全体に薄手であるが、つくりが難で、未製品のような印象を与える。IIIは厚みがあり棒状を呈する。IVは木の葉形を呈するもので、皆つくりはていねいであった。

石材は、黒曜石が49点、玄武岩・赤色チャート・メノウ・硅岩が各1点づつである。

#### イ 石匙

2点出土している。ともに完形を保つが、調整はあまりていねいでない。つまみの抉り部分に調整が加えられているものの、刃部の調整は明瞭でなく、使用による刃こぼれが観察できる。2点とも黒曜石を用いている。

第96図 1号炉址実測図

#### ③ 遺構外出土石器（第97~101図）

遺物包含層が残る調査区北西部を中心に多量の石器が出土したが、そのほとんどは中期末葉の所産であろう。ここではその中の代表的なものに限って提示した。なお、石器の説明に際してここで初めて分類基準を明らかにするが、章立てとしておかしいものの、併せて中期末葉の遺構内出土石器も含めてその概略を述べたい。

中期末葉及び遺構外出土石器は総数755点で、石鎌、石錐、石匙、スクレイパー、不定形の剝

## ウ 石錐

造構外より 2 点が出土した。ともに完形品で棒状を呈している。1 点は黒曜石、もう 1 点はメノウ製である。

## エ スクレイパー

16点中、8点を図化した。ラウンドスクレイパー 4 点、不定形なもの 12 点で構成される。黒曜石が 11 点、メノウが 4 点、赤色チャートが 1 点で、他に比べメノウの割合が高い。

## オ 刺片石器

不定形な刺片を利用したものを一括した。刺片の鋭角的な縁辺部に小剝離痕を有するものを I、明らかに調整が認められるものを II として大別し、さらに調整の小異からそれぞれを a・b に細分した。

I-a は、連続的・規則的な剝離が並び、刃部として調整を加えたリタッチ痕とも判断できるものである。41点中 20 点を図化した。すべて黒曜石を用いている。

I-b は、刃こぼれ的な微細剝離が不規則ないし連続的に認められるもので、使用痕を有した刺片と判断でき、なかには磨滅を作りうるものもある。93点中 38 点を図化した。黒曜石が 90 点、メノウが 3 点である。

II-a は、やや大きめの剝離面を以て全体が調整され、かつそれが整形の目的を意図しているもの。刺片素材獲得後に調整を加えているものも目安としている。表裏両面の規則的・連続的剝離→刃部作出の工程を経るようだが、基本的に器種のわからない未製品がこの範疇に入る。70点中 18 点を図化した。

II-b は、階段状ないし滑した剝離痕が連続するもので、中にはスクレイパー的機能を推定させるものも含まれる。また、両極打法の特徴を有す刺片との関連性も指摘しうる。15点中 5 点を図化した。

## カ ピエス・エスキュー

両極打法の特徴を有す刺片をこれとした。抽出に当たっては、ピエス・エスキューの属性を整理した阿部（1979）・岡村（1983）両論文に従っており、両極石核（石核 II）との区別は、その属性を完備せず、かつ最終剝離面を観察して刺片生産を目的とした痕跡があるものを両極石核とした。ただし、欠損したピエス・エスキューとの区別は困難である。一応 40 点を認定し、内 19 点を図化した。黒曜石 37 点、メノウ 3 点である。

## キ 石核

ネガティブな面で構成された岩塊をこれとし、以下の 3 分類を行った。

I は、通常の石核。64 点出土している。

II は、両極打法の特徴をもった石核。目的的刺片を獲得した残核である。22 点出土しており、内 7 点を図化した。

Ⅲは、階段状ないしツブレ剥離が認められる石核。石核状石器とともに、特に連続敲打痕を認めるものはスクレイパーとの関連が考えられる。17点出土しており、内7点を図化した。

石材はすべて黒曜石である。

#### ク 打製石斧

272点出土し、内、分類可能なまでに遺存するものは183点を数える。基本的な形態的特徴から以下の4種に大別し、さらに形態の小異から細分を試みたものもある。

Iは短冊型を呈するもので、4種に細分した。aは側縁がほぼ垂直なもの(62点中22点を図化)、bは基部端から刃部にかけてわずかに開くもの(63点中31点を図化)、cは側縁がわずかに抉られるもの(18点中9点を図化)、dは三日月状にそりかえった形状を呈するもの(4点中3点を図化)である。

IIは撥型を呈するもので、2種に細分した。aは刃部が基部の約2倍の幅をもつもの(11点中5点を図化)、bは基部が尖るもの(14点中5点を図化)である。

IIIは分銅型を呈するものだが、典型的なものはなく、やや抉りの深いものをこれとした。7点中、4点を図化した。

IVは基部・刃部ともに尖るもので、木の葉型を呈している。4点中、3点を図化した。

石材は玄武岩が267点と圧倒的に多く、他に流紋岩2点(I a・II b)、輝石安山岩2点(I b・不明)、粗面安山岩1点(不明)が存在する。

#### ケ 磨石器

拳大の礫に簡単な調整を施したものを作成した。2点出土しており、内1点だけを図化した。ともに利用石材は玄武岩である。

#### コ 磨製石斧

8点が出土しており、形態が不明な小破片2点を除いた6点を図化した。内、5点は定格型、1点は船型を呈する。石材は緑泥片岩6点、輝綠岩が1点、砂岩が1点である。

#### サ 磨石

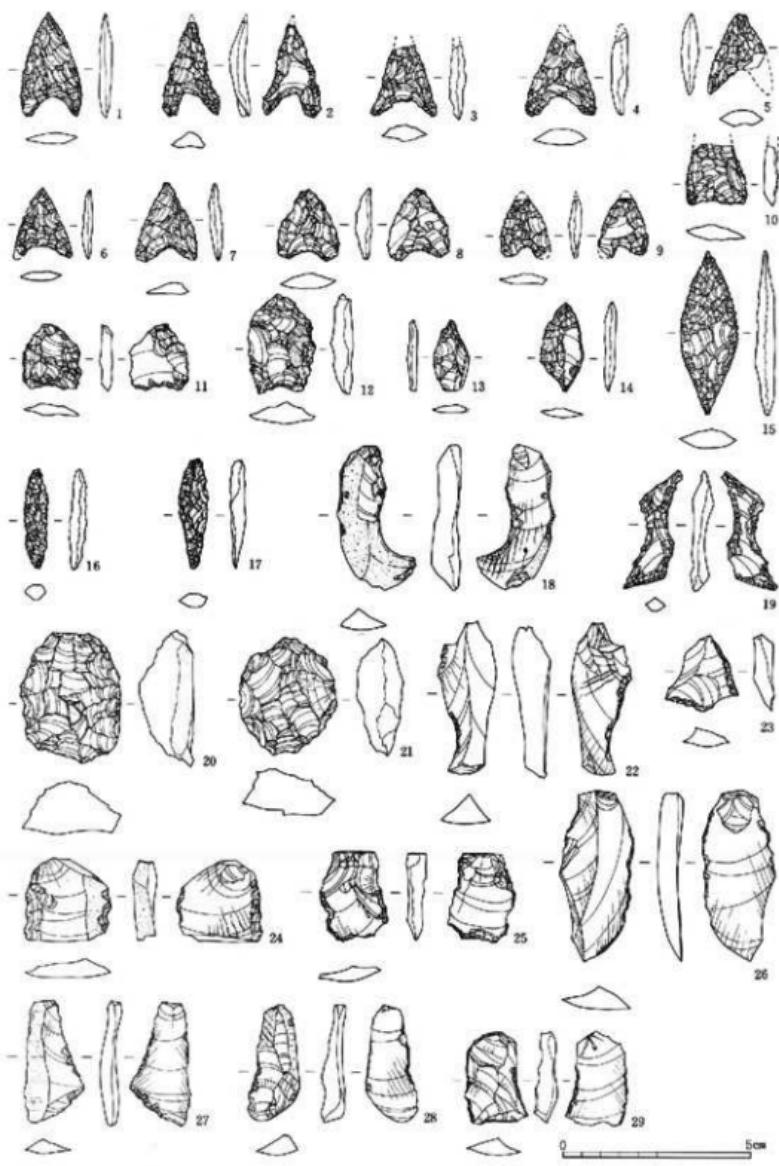
15点出土し、内10点を図化した。石材は輝石安山岩が8点、角閃石安山岩が1点、溶結安山岩が2点、玄武岩2点、輝綠岩が1点、花崗斑岩が1点である。

#### シ 四石

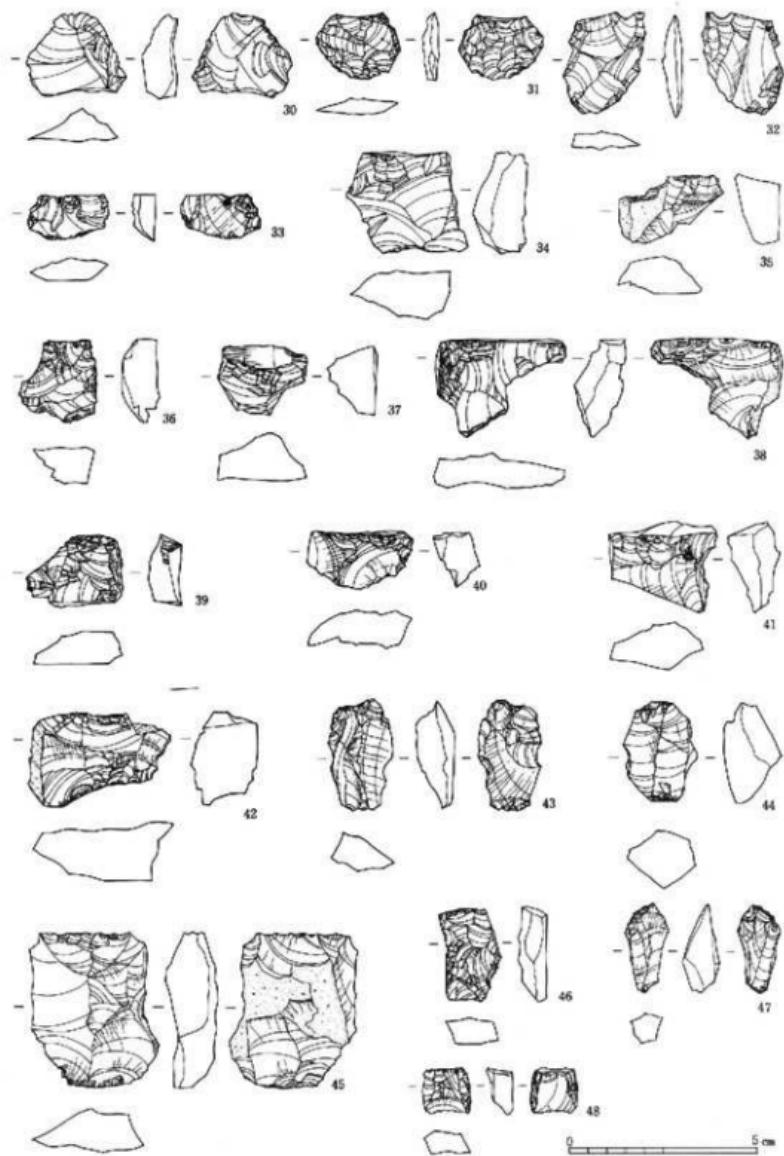
16点出土しており、内14点を図化した。多くは表裏に1ないし2の凹をもつ。また擦痕や敲打痕を伴うものもある。石材は輝石安山岩11点、角閃石安山岩2点、角閃石輝石安山岩1点、溶結安山岩1点、玄武岩1点である。

#### ソ 蜂の巣石

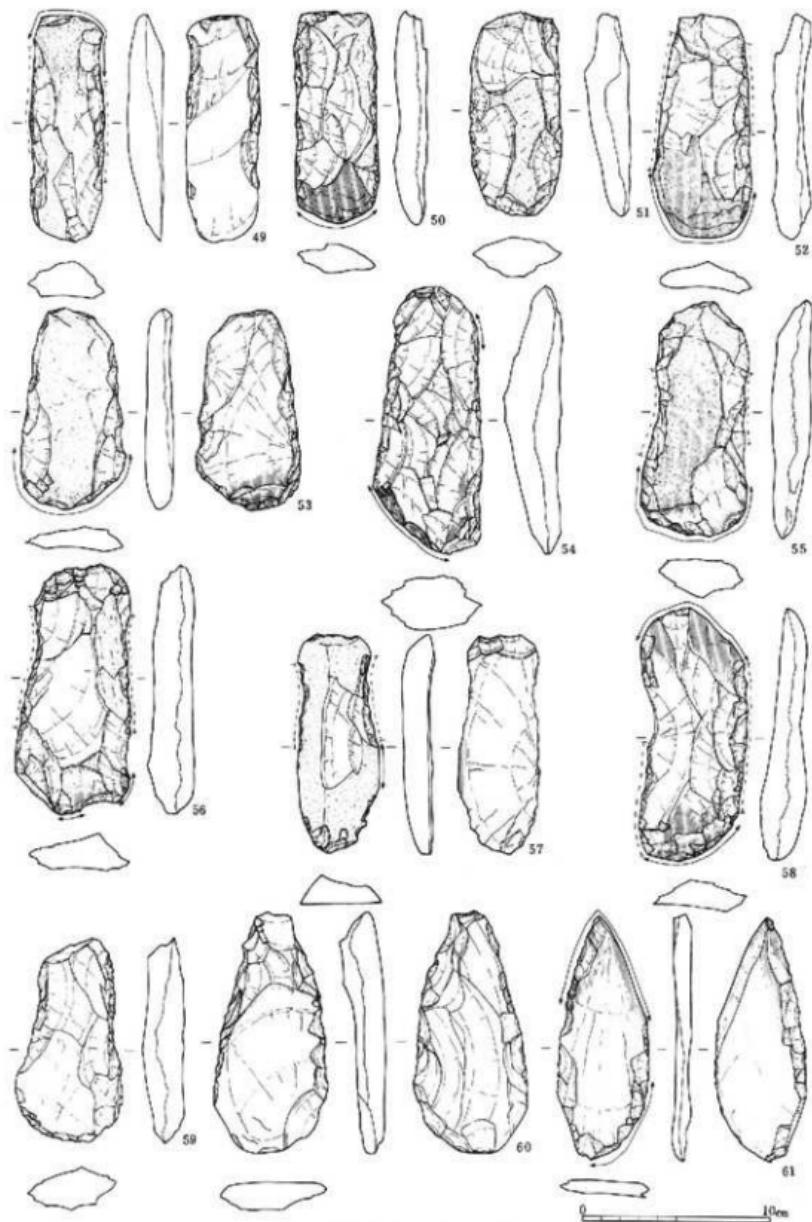
10点出土しておりそのすべてを図化した。石材は輝石安山岩4点、角閃石安山岩4点、角閃石輝石安山岩1点、玄武岩1点である。



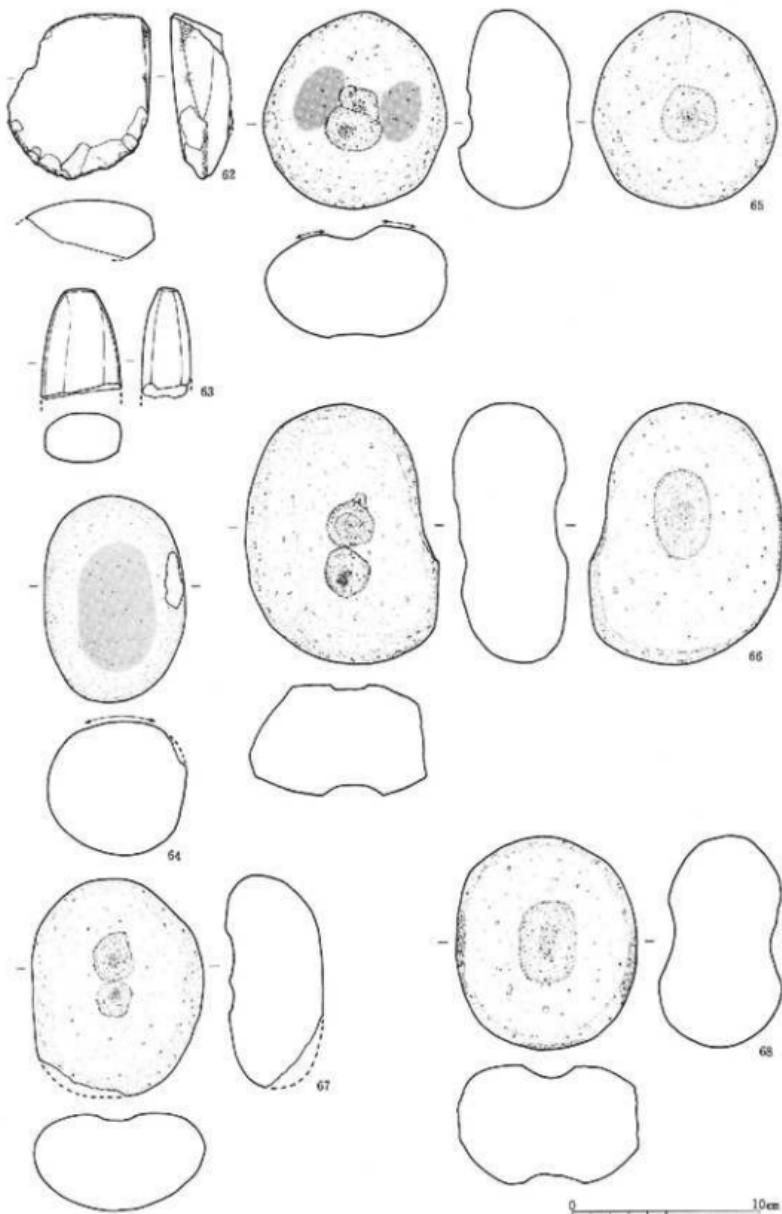
第97図 縄文時代の遺構外出土石器実測図(1)



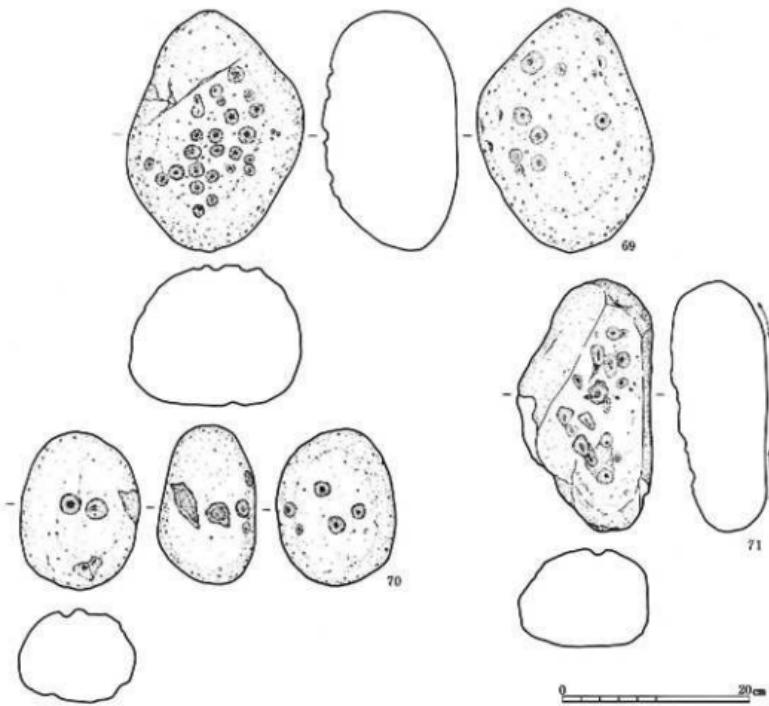
第98図 繩文時代の遺構外出土石器実測図(2)



第99図 縄文時代の遺構外出土石器実測図(3)



第100図 縄文時代の遺構外出土石器実測図(4)



第101図 縄文時代の遺構外出石器実測図(5)

第6表 縄文時代の遺構外出土石器観察表

図-No	出土位置	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
97-1	お-4 G	石 鋸	凹基	2.8	1.7	0.3	1.2	完形	赤色チャート
-2	か-4 G	"	"	(2.6)	1.6	0.4	(1.0)	上一部欠	黒曜石
-3	"	"	"	(1.9)	1.8	0.45	(0.7)	上1/5欠	珪岩
-4	い-9 G	"	"	(2.2)	1.8	0.45	(1.4)	上一部欠	黒曜石
-5	9号住	"	"	2.1	(1.5)	0.4	(0.8)	脚一方欠	"
-6	け-6 G	"	"	1.9	(1.5)	0.25	(0.5)	脚一部欠	"
-7	か-9 G	"	"	2.2	1.7	0.35	1.0	完 形	玄武岩
-8	11号住	"	"	2.0	1.7	0.4	1.0	"	黒曜石
-9	17号住	"	"	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.6)	上下欠	"
-10	け-7 G	"	"	(1.6)	1.7	0.4	(1.0)	上1/3欠	"
-11	う-5 G	"	"	1.6	1.5	0.3	0.9	完 形	"
-12	せ-7 G	"	"	2.7	1.8	0.6	2.6	"	"
-13	け-7 G	"	凹基	1.9	(0.9)	0.25	(0.4)	一部欠	"
-14	え-3 G	"	尖基	2.4	1.2	0.2	0.6	完 形	"
-15	11号住	"	"	4.4	1.6	0.5	2.7	"	"
-16	え-9 G	石 鋸	"	2.7	0.6	0.4	0.9	"	メノウ
-17	表 採	"	"	3.0	0.7	0.4	0.8	"	黒曜石

図-No	出土位置	器種	分類	長	幅	厚	重	残存	石質
-18	14号住	スクレー		3.9	2.1	0.8	3.7	〃	〃
-19	2 T 1区	"		3.2	1.5	0.5	1.3	〃	〃
-20	"	ラウスク		3.5	2.7	1.5	12.5	〃	メノウ
-21	"	"		3.2	2.6	1.2	9.0	〃	〃
22	17号住	剝片石器	I a	4.6	1.6	1.0	3.6	〃	黒曜石
-23	け-6 G	"	"	2.0	1.9	0.5	0.9	〃	〃
-24	こ-9 G	"	"	2.2	2.3	0.7	3.0	〃	〃
-25	く-8 G	"	"	2.4	1.9	0.5	1.8	〃	〃
-26	17号住	"	I b	4.0	2.0	0.6	4.0	〃	〃
27	9号住	"	"	3.3	1.7	0.5	1.5	〃	〃
-28	う-7 G	"	"	3.1	1.4	0.6	1.6	〃	〃
-29	さ-9 G	"	"	2.5	1.6	0.6	1.6	〃	〃
98-30	き-7 G	"	II a	2.2	2.7	1.0	4.4	〃	〃
-31	お-5 G	"	"	1.7	2.3	0.5	1.4	〃	〃
32	1 T 2区	"	"	2.7	2.2	0.5	2.3	〃	〃
-33	17号住	"	"	1.2	2.2	0.6	1.4	〃	〃
-34	か-6 G	石核	II	2.7	3.3	1.5	10.6	〃	〃
-35	お-5 G	"	"	1.9	2.8	1.2	4.1	〃	〃
-36	け-6 G	"	"	2.2	2.0	1.0	3.8	〃	〃
37	こ-4 G	"	III	1.8	2.4	1.4	4.9	〃	〃
-38	17号住	"	"	2.6	3.5	1.4	6.5	〃	〃
-39	く-8 G	"	"	1.9	2.6	0.9	4.5	〃	〃
-40	き-7 G	"	"	1.5	2.9	1.2	3.9	〃	〃
-41	せ-7 G	"	"	2.4	2.9	1.4	6.2	〃	〃
-42	17号住	"	II	2.5	3.8	1.8	13.9	〃	〃
-43	き-8 G	ビエス		3.0	1.8	1.0	4.5	〃	〃
-44	え-4 G	"		2.7	2.1	1.5	6.5	〃	〃
45	11号住	"		4.2	3.4	1.4	18.9	〃	メノウ
-46	え-7 G	"		2.5	1.7	0.7	3.5	〃	黒曜石
-47	11号住	"		2.4	1.3	1.0	1.8	〃	〃
48	さ-9 G	"		1.2	1.3	0.7	1.1	〃	〃
99-49	お-5 G	打製石斧	I a	12.1	4.0	2.0	115	〃	玄武岩
-50	う-5 G	"	"	11.4	4.6	1.8	109	〃	〃
51	お-2 G	"	"	11.0	5.0	2.5	142	〃	〃
-52	う-7 G	"	I b	12.0	5.3	2.0	128	〃	輝石安山岩
-53	2 T 1区	"	"	10.7	5.8	1.5	107	〃	玄武岩
-54	か-3 G	"	"	14.5	5.8	3.1	250	〃	〃
-55	う-5 G	"	I c	12.6	5.7	2.1	159	〃	〃
-56	2 T 2区	"	"	13.5	6.3	2.5	206	〃	〃
57	お-2 G	"	"	11.7	4.4	1.8	102	〃	〃
-58	う-7 G	"	I d	13.6	5.8	2.5	250	〃	〃
-59	"	"	II a	11.0	5.8	2.2	146	〃	〃
60	え-3 G	"	II b	13.0	6.1	2.5	170	〃	〃
-61	う-5 G	"	IV	13.1	5.0	1.0	61	〃	〃
100-62	16号住	磨製石斧	略?	(8.9)	7.7	3.3	(260)	上2/3欠	綠泥片岩
-63	2 T 1区	"	定	(6.0)	4.3	2.6	(113)	下1/2欠	〃
-64	え-4 G	磨石		11.2	7.5	7.2	(760)	一部欠	溶結安山岩
-65	お-5 G	圓石		10.6	9.8	6.0	679	完 形	輝石安山岩
-66	う-5 G	"		14.0	10.4	6.0	1301	〃	玄武岩
67	2 T 2区	"		(11.6)	9.1	5.2	(630)	一部欠	輝石安山岩
-68	"	"		11.5	9.7	6.6	702	完 形	〃
101-69	表探	蜂の巣石		26.0	19.1	15.5	8402	〃	〃
-70	え-5 G	"		22.0	13.0	10.6	2705	〃	〃
-71	お-9 G	"		27.0	14.4	10.5	5112	〃	輝石角閃石安山岩

## 2 古墳時代の遺構と遺物

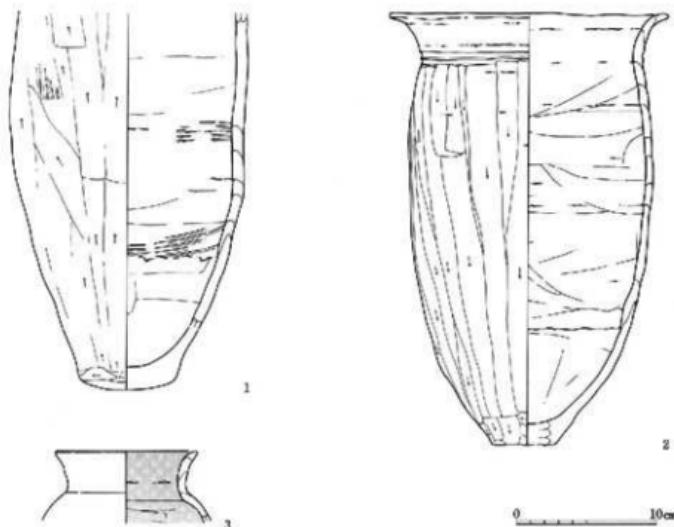
遺構は、後期の住居址を1軒検出したのみである。集落の一部を調査しただけであるから、該期集落の規模は不明と言わざるを得ないが、遺構外出土資料が皆無であることから、少なくとも大規模な、かつ長期的な集落は想定できまい。

### 9号住居址 (第103・104図)

うー7・8グリッドに位置し、北半は調査区外に及んでいる。主軸長約3.8m、壁高約35cmを測る。床は、軟質であるが全体に貼り床を認めた。竈は東壁に存在する。石組み竈と考えられ、袖先端と思われる部分に掘方に埋設された割り石が立石していた。粘土・煙道等は確認し



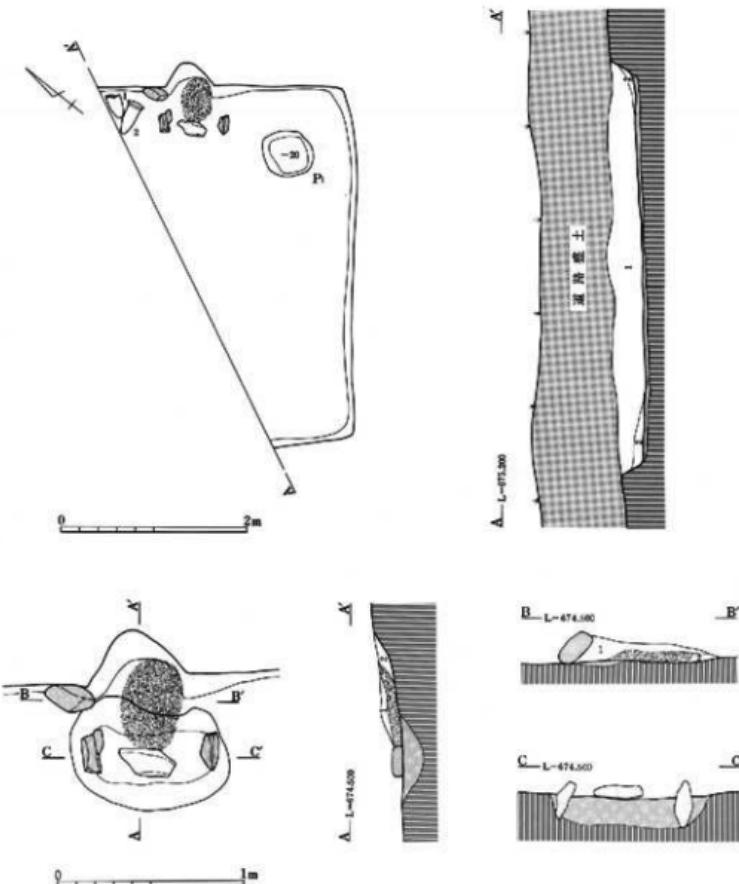
第102図 古墳時代後期の遺構配置図



第103図 9号住居址出土遺物実測図

ていない。竈右に深さ20cmの方形のピットが存在するが、埋土の状況から察して本址に帰属する可能性が高い。やや小さいものの貯蔵穴とすべきだろうか。

遺物の出土量は少なく、固化した3点以外はわずかに数点の土器破片を認めたに過ぎない。1・2は竈左から横倒しの状態で出土した 形土器である。ともに床直出土であり、また2はほぼ完形を保つ。3は内面黒色処理された小形の壺形土器の胴上半1/2 破片。覆土中より出土している。



第104図 9号住居址実測図

### 3 平安時代の造構と遺物

竪穴住居址 8軒を散在的に検出した。切り合いはない。覆土は绳文時代のそれとは異なり、一様に粘りけの強い黒色土が堆積していた。規模・構造に差異があるものの時期差は差ほど認められず、概ね10世紀代の所産と考えられる。

#### 1号住居址（第106図）

かー1・2グリッドに位置し、南東隅だけが調査区にかかっている。耕作土直下で検出した。壁高は約40cmを測る。規模は不明だが、竈の位置から考えて一辺3m強の住居が想定できる。床は、竈付近の極一部に堅緻面を認めた以外は全体に軟質である。掘方は確認できず、掘削面をそのまま床として利用したものと考えられる。

竈は石組み竈で、東壁に構築されている。すべてではないだろうが両袖に自然礫が遺存しており、石組みの状況が判断できる。但し、粘土は確認できなかった。

提示した遺物は少なく、また覆土に混入する遺物そのものも微量なものであった。図示したのは、土師器壺1点・須恵器壺2点・武藏型の甕1点である。2は竈火床直上から、他は床面から出土した。なお、壺底部は土師器壺が手持ちヘラ削り、須恵器壺がともに回転糸切りである。

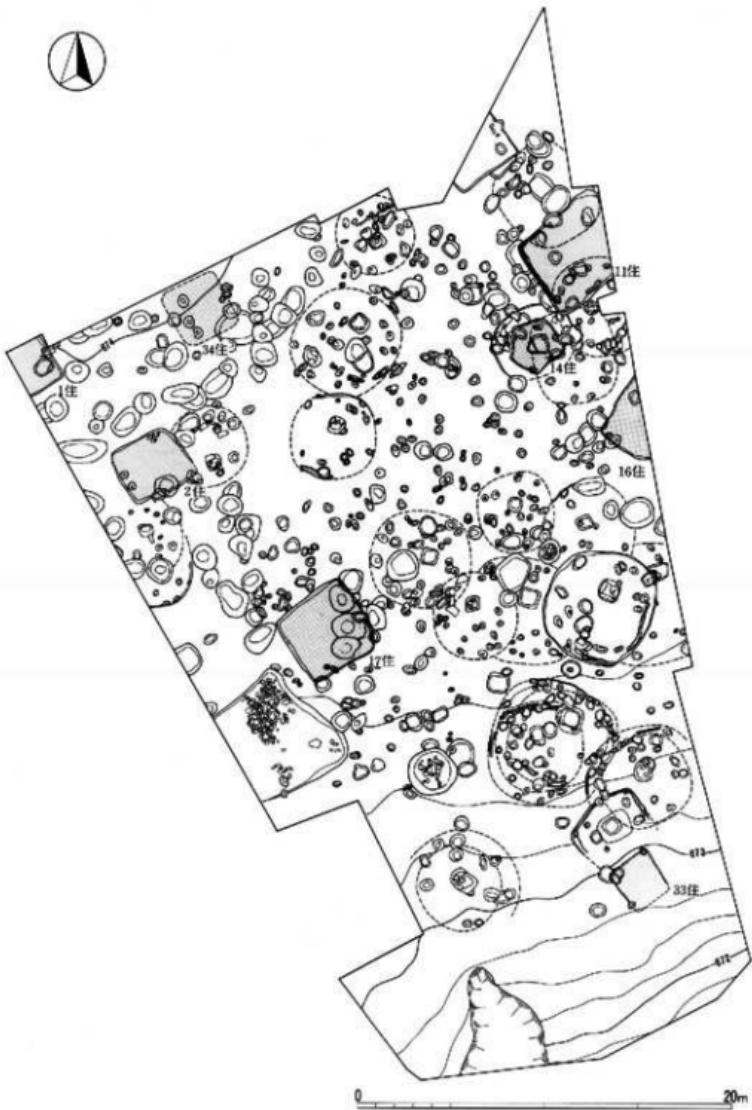
#### 2号住居址（第107・108図）

きー3グリッドに位置する。主軸長約3.8m・副軸長約3.4mを測り、深さは最高でわずかに14cmを測る。壁・床ともにはば完存するが、南東コーナーのみが擾乱されていた。

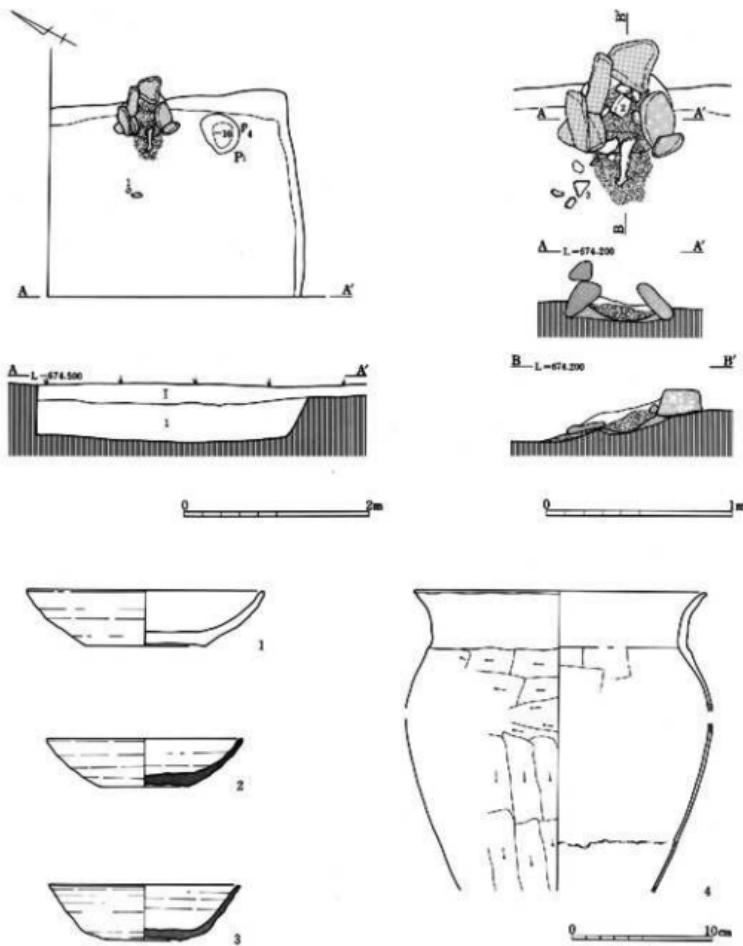
床は、硬化面こそ認められないが、全面に貼り床を施すものであった。全体に数cm程の掘方埋土を確認している。

竈は、南壁西寄りと北壁東寄りに付設されている。北壁に存在するものは掘方・張出しを認めず、ただ床面上に焼土が堆積しそれを焼けた割り石が覆うだけであったが、南壁西寄りのそれと位置的に対峙関係にあることも考慮して竈と認定した。南壁に存在するものは袖最奥部に袖石が遺存しており、壁から張り出した掘方をもつことからも、こちら側の方がよりしっかりした構造を呈するものであろう。2基が同時併存したものならば、南壁側のものが主、北側のものが副とした役割を果たしていたのではなかろうか。

遺物は、土師器壺5点・須恵器壺1点・北信系の土師器甕5点・土師器小形甕1点、計12点の土器を図示した。内、8と10は同一個体の可能性があるものの、復元径に大きな開きが生じたため、止むなく別個体とした。2・4・9は北側の竈内及びその周辺、他は床面から出土している。壺底部は、4が切り離し後の回転ヘラ削り、5が静止糸切りである。なお、6に墨書を確認した。おそらく「目」と書かれたものであろう。



第105図 平安時代の遺構配置図



第106図 1号住居址実測図及び出土遺物実測図

#### 11号住居址 (第109・110図)

え。おー8・9グリッドに位置し、東壁側は調査区外に及んでいる。主軸長で約4.6mを測り、壁は最高で20cm程が現存している。

床は、全面貼り床されており、また壁近くを除いて広く硬化面が分布していた。

竈は、北壁中央に構築されている。遺存状況はけっして良好でないが、袖奥両側に埋設された

軸石が残存していた。

遺物は、土師器壺9点・土師器皿1点・須恵器壺1点・灰釉陶器碗1点・北信系の土師器甕2点・土師器小形甕1点を図示した。2・3・6・7・13・14は竈から、他は床面から出土している。土師器壺は、2・5が底部回転糸切り後周囲を手持ちヘラ削りするもので、他は回転糸切り痕をそのまま留める。また同6・9は墨書き土器で、6は「木」、方向こそ違うが9も同じ字を記している可能性が高い。なお、12の灰釉陶器碗は0-53に比定される。

#### 14号住居址 (第111図)

お・かー8グリッドに位置する。2.8~2.5mの不整形かつ小形の住居址である。壁高は最高20cmを測るが、ほとんどの箇所では10cmにも満たない。住居とするかどうか疑問の残るところだが、竈とおぼしき造構を伴うことで一応認定した。

床は、貼り床及び堅織面が認められず、掘り込んだ面をそのまま床として利用している。また凹凸・傾斜が著しいものであった。

P1とした北壁張り出し部分に存在するピットは、覆土中より当該期の遺物が数点出土していることから本址に帰属させた。

竈と考えたものは、東壁南寄りに位置する。壁から大きく張り出しており、厚く堆積した焼土とともに焼けた石及び土器が伴出している。その東外にも接合する土器が認められたが、耕作直下での検出でもあることから、擾乱による位置ずれと理解しておきたい。

図示した遺物は、すべて竈内に遺存していたものである。覆土中には微量の土器破片が含まれるに過ぎなかった。1~4が土師器壺、5・6が北信系の土師器甕。3・4の壺底部は、両者回転糸切りである。

#### 16号住居址 (第112図)

か・きー10グリッドに位置し、住居東半は調査区外に及んでいる。深さは最高で30cmを測るが、1コーナーだけの検出のため規模は不明である。また、竈も調査区外に位置するようだが、おそらく東壁に構築されているものだろう。

床は、ほぼ全面が堅織なものであり、明瞭な掘方も確認した。

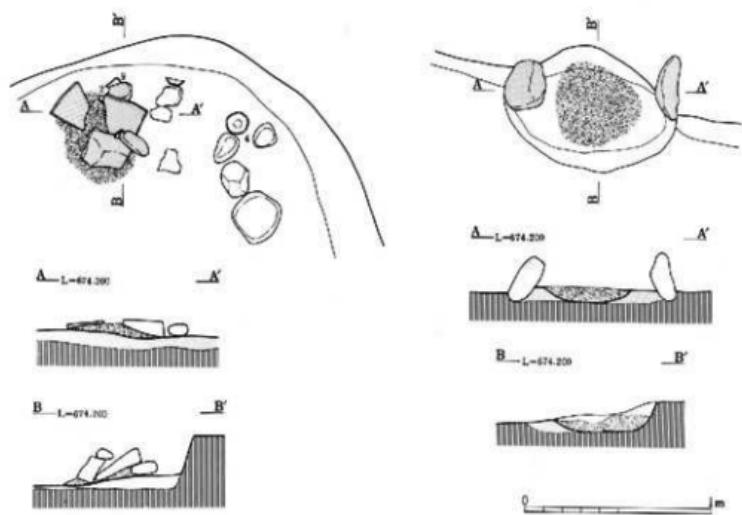
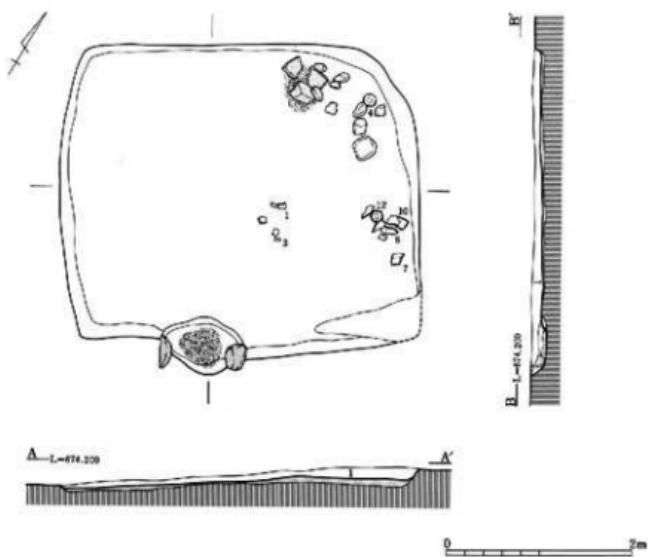
出土遺物は微量である。P1内及びその周辺から回転糸切りの須恵器壺と土師器甕の小片が出たに過ぎず、図化するまでには至らなかった。

#### 17号住居址 (第113・114図)

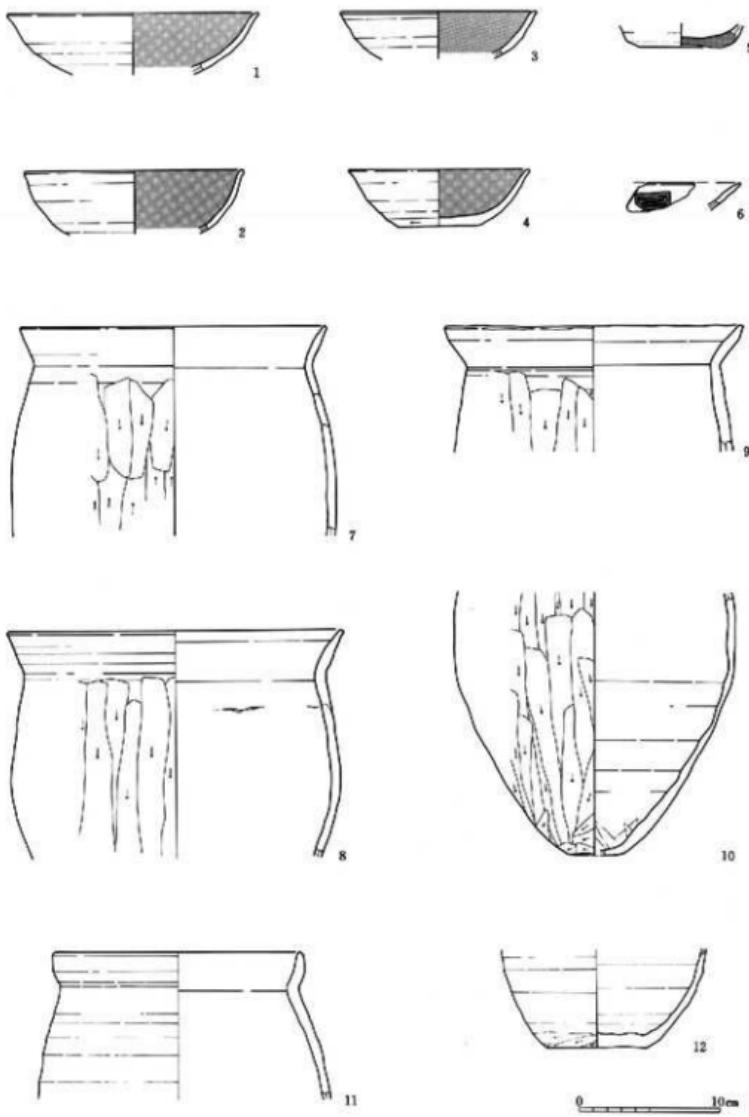
けー5・6グリッドに位置する。主軸長約1.5m・副軸長約4.3mを測り、壁は全体に15cm前後が遺存している。

床は、凹凸が少なく且つほぼ水平を保つものであった。ローム面をそのまま床としており、貼り床・堅織面等はまったく認められなかった。

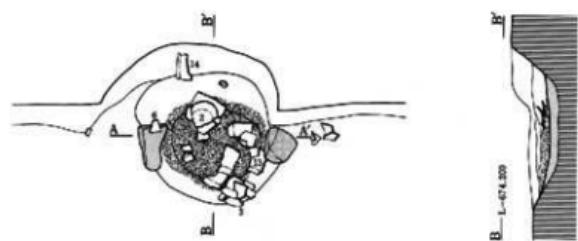
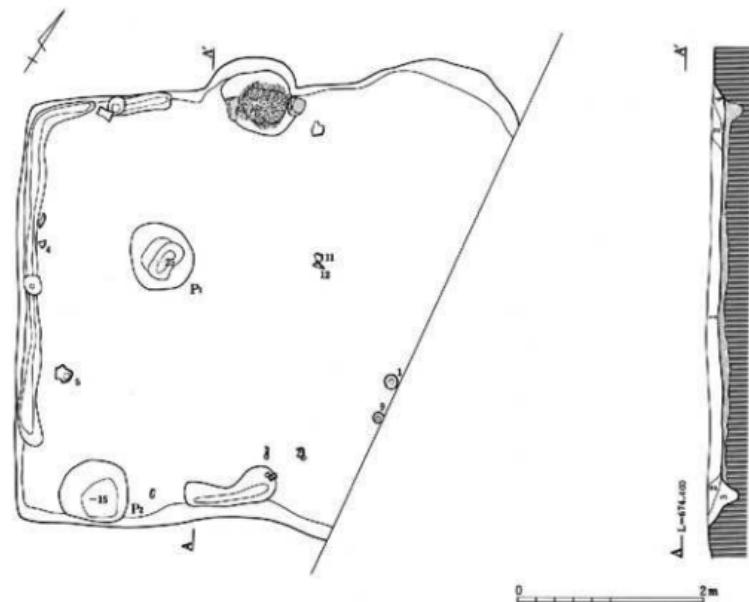
竈は、東壁中央やや右寄りに付設されている。壁からわずかに張り出した掘方及び軸の一部を



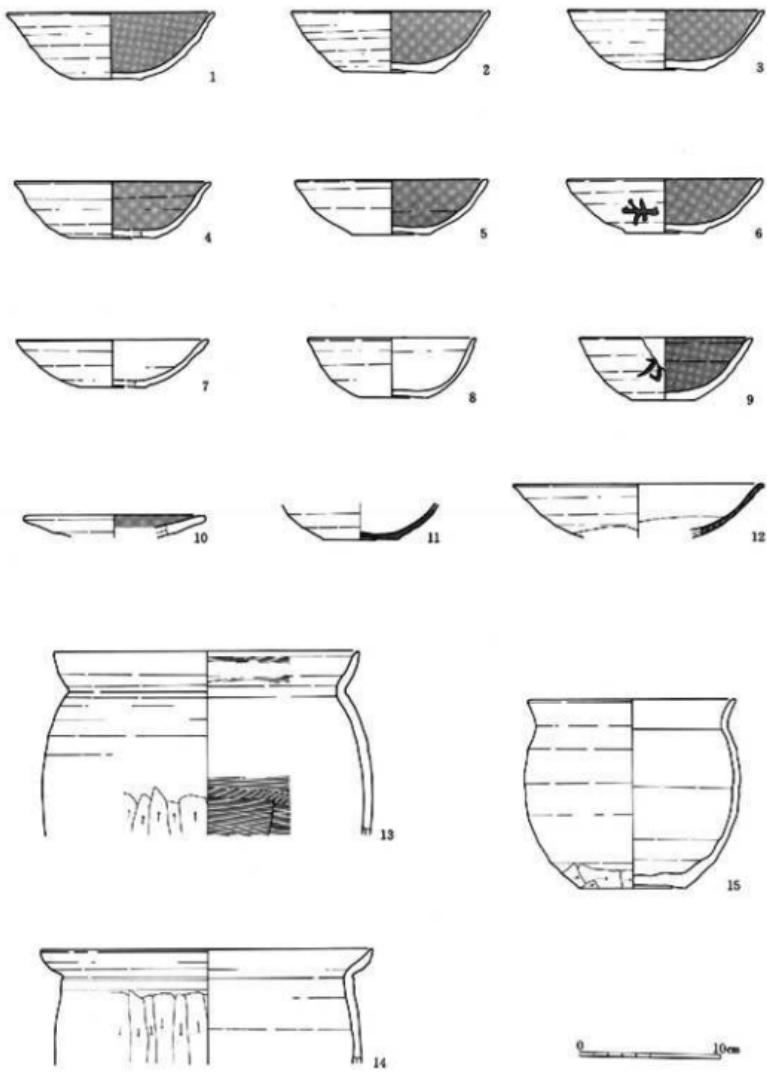
第107図 2号住居址実測図



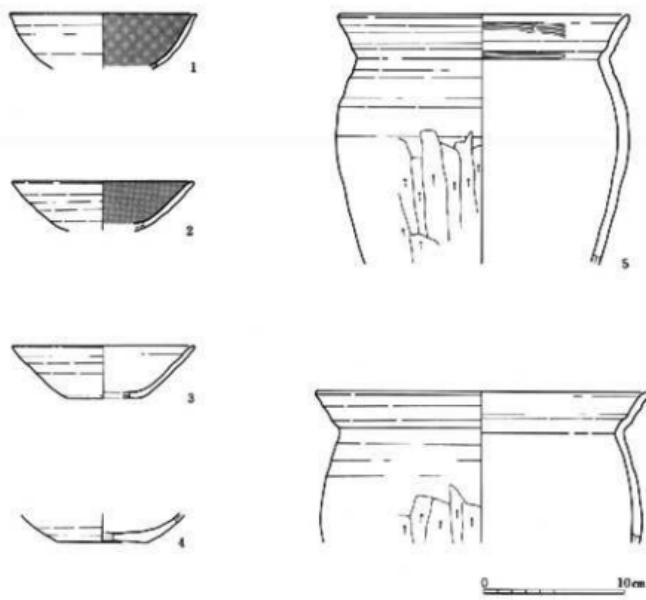
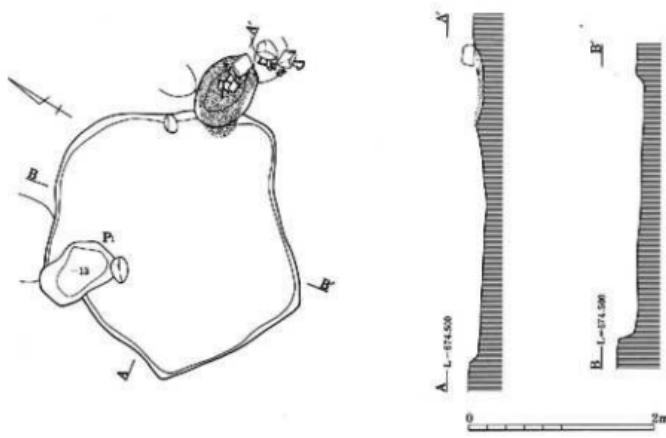
第108图 2号住居址出土造物实测图



第109図 11号住居址実測図



第110图 11号住居址出土遗物实测图



第111図 14号住居址実測図及び出土遺物実測図

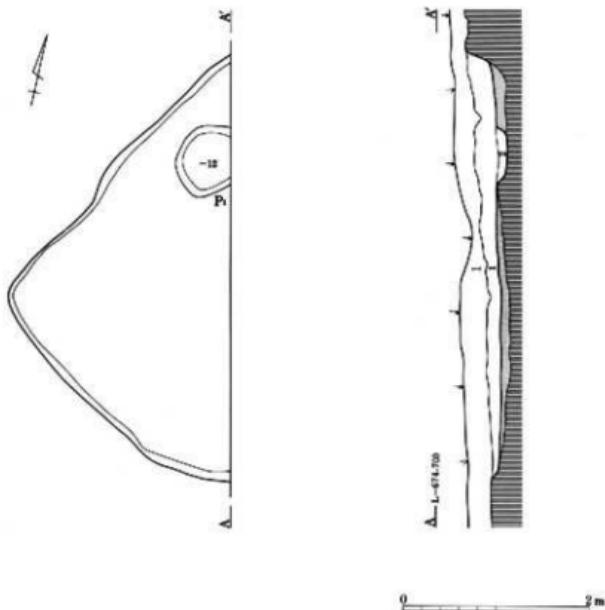
確認した。袖左はその先端に細長い自然縫を立石させており、また右はその付け根にローム土を主体にした粘土袖が残存していた。

遺物は比較的豊富であり、主に床面に散在していた。図示した遺物はすべて土師器で、壺8点・皿2点・高台付壺3点・北信系の甕3点・小形甕3点・武藏型の台付き甕1点の計20点を数える。17が甕、他は床面から出土したものである。壺底部は、1・8・10が切り離し後回転ヘラ削り、3・9が回転糸切りである。

### 33号住居址 (第116図)

し・すー9・10グリッド、傾斜のきつい斜面に位置し、等高線にはほぼ平行した軸を以て構築されている。より下方に位置する南壁は土砂流出のため既に破壊されていた。東西軸長でわずか約2.4mを測るに過ぎず、住居とすれば非常に小形なものとなるが、甕の残骸と考えられる焼土溜まりを検出したことで住居と認定した。

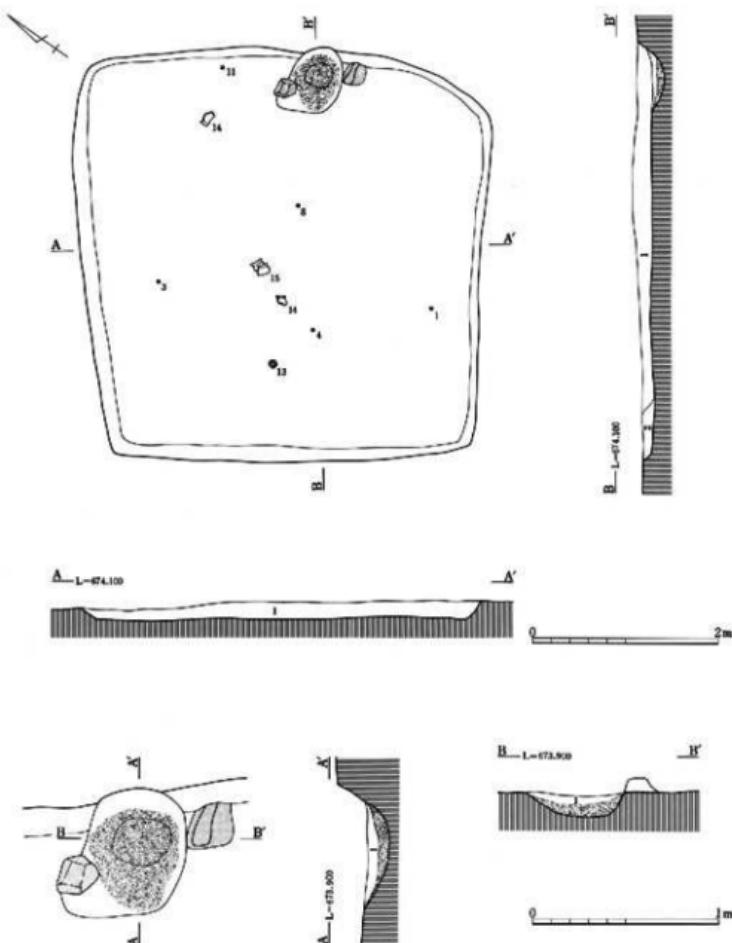
床は、掘り込んだローム面をそのまま利用するものである。小さな凹凸、斜面に平行した傾斜を認めた。堅緻面は存在しない。



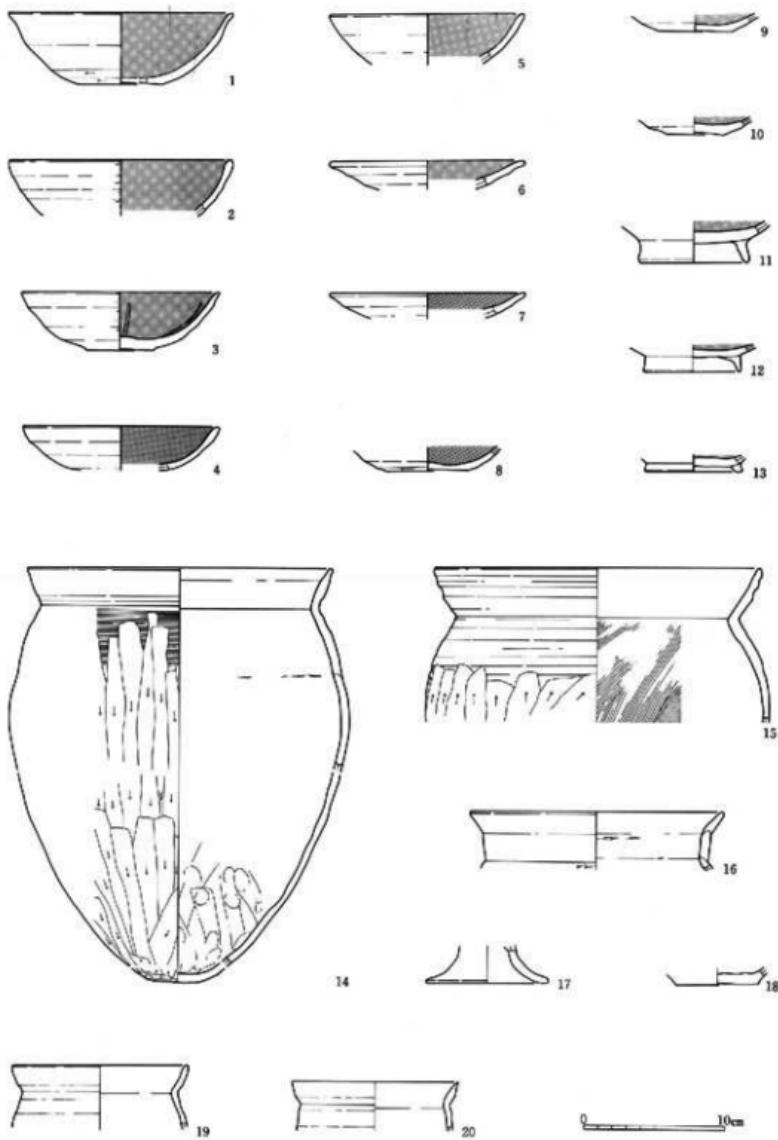
第112図 16号住居址実測図

窓と考えたのは、西壁にやや張り出して存在するピットである。焼土を認める以外は何ら施設を残していない。住居が方形を呈するものと仮定すれば、南西コーナー付近に位置することになる。

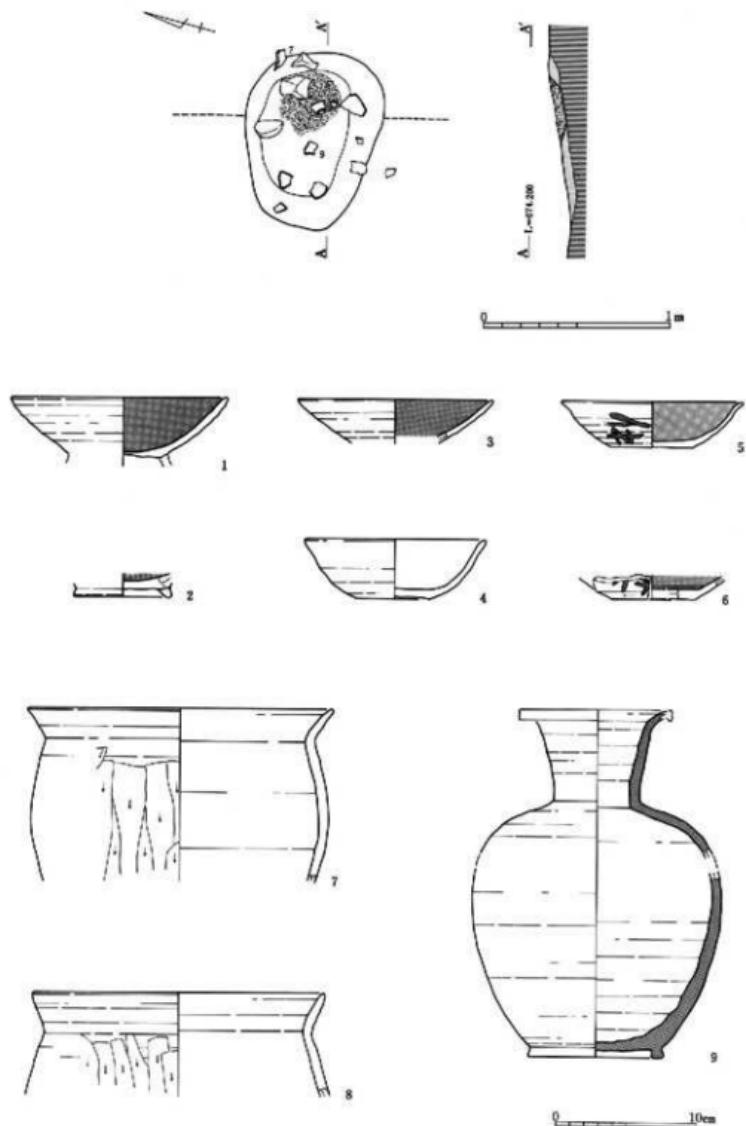
遺物は図化していないが、窓から須恵器壺の底部破片が1片だけ出土している。底部は回転系切りである。



第113図 17号住居址実測図



第114図 17号住居址出土遺物実測図

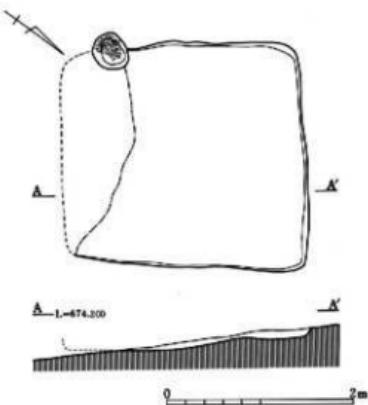


第115図 34号住居址実測図及び出土遺物実測図

34号住居址 (第115図)

おー4グリッドに位置する。竈の掘方と考えられる焼土溜まりピットが遺存するに過ぎない。しかし、その西側同レベルに該期の遺物が数メートルの範囲に渡って散在していたことから、わずかに残る住居覆土の見落としと判断し住居址として認定した。妥当なら、竈は東側に付設されていたことになる。

遺物は、土師器高台付坏 2点・土師器坏 4点・北信系の土師器甕 2点・須恵器坏 1点、計 9 点の土器を図示した。4~6・8 が覆土、他が竈から出土している。高台付坏の 2 と坏の 6 は底部切り離し後回転ヘラ削りを、また坏 5 は回転糸切り後周囲に手持ちヘラ削りを施すものである。5・6 には墨書を認め、ともに一部を欠失するが同一文字が書かれている可能性が高い。ただし、方向は異なる。なお、文字は判読不能である。



第116図 33号住居址実測図

## 4 成果と課題

### (1) 縄文時代中期後葉土器の時間的位置づけ

本遺跡が所在する東信地方における縄文時代中期後葉の土器様相については、従来資料的な制約もあり、他地域に比べ不明確な部分が多く残されていた。しかしながら、先頃、綿田弘実氏による整理（綿田1989）がなされるなど、当該地の該期土器群の整理・分析もようやくその態勢を整えつつあると言えよう。このような状況下において、本遺跡でも良好な中期後葉土器の出土をみたことから、東信地方西部でのあり方として土器の変遷段階を設定することにより、若干の時間的位置づけを試みておきたい。

本遺跡出土資料は、系統的に加曾利E式ないし同系土器・唐草文系土器・北信地方から新潟県域にかけて主要に分布する圧痕隆蒂文系土器（綿田1983ほか）・主に佐久地方を中心に分布する土器・曾利系土器に大別して把えることができる。これら土器群は時間的な流れの中で様々な態容を生起させ、かつ相間させており、複雑な様相を呈しているが、ここでは、中心的な位置を占める加曾利E式土器と唐草文系土器の二者を基軸に据えて考えることとする。加曾利E式土器については学史的に得られている成果を援用しつつ細分を行い、唐草文系土器については東筑摩郡山形村殿村遺跡の報文で行った段階設定（百瀬1987）との比較・対応を試みた。唐草文系土器の細分案としては中部高地縄文土器集成グループや米出明訓氏らによる一連の作業（中部高地縄文土器集成グループ1979・米田1980など）が提出され、報告書等に生かされているものの、それらは加曾利E式土器や曾利式土器の編年区分との併行的細分に主眼が置かれたものであり、唐草文系土器内部からの段階設定、さらに型式としての統合・昇華を踏まえたものではない点に多々問題を内包していたと言える。そこで、あえて地域の異なる殿村遺跡での分析作業を段階設定の基準として採用することにした。それはまた、ここで行う段階区分が土器群の縦年細分を意図したものにとどまらず、本遺跡での土器群の変化・変遷の在り様を明らかにすることによって、集落の動きを出来る限り詳細に顕在化することをもアプローチの対象としていること、さらに先の殿村遺跡例において行った唐草文系土器内部の地域差を含む実相把握の試行を一步推し進めることを目的としたことによる。

上記の基本的立場から、本遺跡出土土器を中心に町内既出土器（「付 資料紹介」参照）も加えて検討を行い、四日市遺跡第1段階から同第4段階を設定した。以下、各段階の様相について述べる。ただし、床面と埋設土器あるいは床面と覆土といった出土状態からの分析が困難であることから、一定の限界を内包したものにならざるを得ない点を書き添えておく。

#### 四日市遺跡第1段階

27号住および30号住出土土器（図中2・3）によって設定される段階であり、これに町内既出の竹室遺跡出土土器（図中1）が加わる。1は前2者に先行するものであるが、既出資料でもあり便宜的にここで扱う。すべて唐草文系土器に対比され、加曾利E式土器の出土は不明である。その他の土器群についても本段階での出土は確認されていない。資料に乏しく本段階の全体像については詳細にしえないが<sup>6</sup>、2・3はともに口縁部文様帶を有し、区画内に連続交互刺突文を伴う。2は横状の把手をもち、胴部には1本及び2本一組の隆帯により、分岐する渦巻状のモチーフが描かれる。胎土・調整等においては唐草文系土器に共有する属性を備えているものの、口縁部文様に地域的特徴が認められる。

地域的な差異により直接的な比較はむずかしいが、胴部のモチーフや口縁部の連続刺突文の在り方などから、1については殿村第5段階に、2・3については同第6・7段階に対比されるものと考えられる。また、本段階に先行する土器として、第120図16-18に示した町内既出の把手類が挙げられる。

#### 四日市第2段階

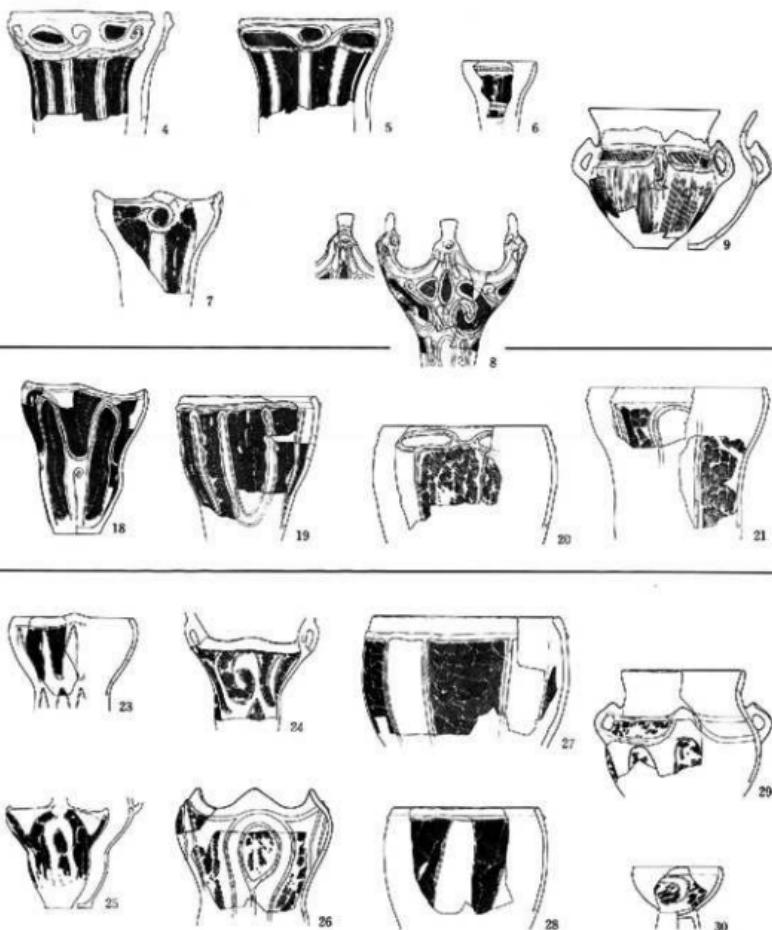
6号住および23号・24号・26号の各住居址出土土器（図中4～6・15・16）、さらに51号土坑一括出土土器（12～13）などによって設定される。加曾利E式土器の出土が顕著に認められるようになり、10のような折衷的土器も生成される。加曾利E式土器は器形・文様等においてその主要分布域である関東地方で出土するものと大差がないことから、群馬県域などを通じて直接的な影響を受けていたものと考えられる。先の殿村遺跡においては在地化の進行が認められており、より加曾利E式分布圏に近接した本地域の地域性を端的に物語っている。こうした様相は佐久地方を中心とした東信地方東部においては尚いっそう著しい。文様は口縁部に渦巻文や横円文による横位文様帶を有し、胴部には縱位の繩文帶と無文帶とが交互に施文される。既出土器の7は文様・モチーフに退化の方向性が現われている。また、8・10も新しい要素を備えており、とりわけ8については文様要素から見て、次の第3段階に含まれる土器であろう。

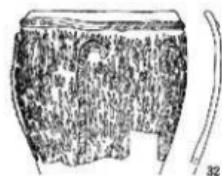
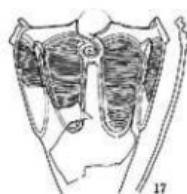
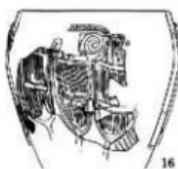
唐草文系土器は、殿村遺跡での事例から大きく2分して扱えることができる。前半は51号土坑出土土器によって特徴づけられる段階であり、それに後続する土器として町内既出の14が挙げられる。殿村第8・9段階に対比される。後半は6号住・24号住・26号住の各住居址出土出入口部埋甕が相当する。繩文を地文とする15のように加曾利E式（系）土器との融合化が認められると同時に、文様・モチーフの点で在地的な差異化が端的となる。本地域における唐草文系土器の衰退を象徴している。

このほか、佐久地方を中心に分布が知られている土器も本段階には共存する（第86図189～192）。また、16の口縁下文様に見られる要素から、22に先行する压痕隆帯文系土器も既に成立している

第1段階

殷村第5～7段階





第117図 繩文時代中期後葉の上器変遷

ことが推測され、その影響の波及が看取される。

#### 四日市第3段階

19号住および19号土坑出土土器によって特徴づけられる。他には、8号土坑出土土器（第59図31～38）や町内既出の19も本段階に含まれよう。加曾利E式土器は、波状沈線区画文を基本とする文様や沈線による逆「U」字状の懸垂文の組み合わせに変わる。上端部が蕨手状をなす懸垂文も特徴的である。20や8号土坑出土土器のように、口縁部文様帶の名残りをとどめるものも存在するが、それらの胸部文様は幅広の無文帶と縄文帶により分割されるようになる。この段階より加曾利E式土器が主体を占めるようになり、逆に唐草文系土器の存在は希薄となる。

唐草文系土器は質的にも大きな変化を遂げ、8号土坑出土土器中に見られるような形態（第60図38）になると思われるが、好例には應まれていない。8号土坑出土例から推察されるように、殿村第12段階に併行すると考えられるものの、唐草文系土器以外の土器組成については、その内容を全く異にしている。

その他、圧痕隆帯文系土器の典型例の出土が認められる（22）。土坑からの一括出土であり、加曾利E式土器との共伴が確認できる貴重な資料といえる。

#### 四日市第4段階

12号住炉内一括資料や25号住出土土器、さらに1号土坑出土土器などにより設定される段階である。町内既出資料の31・32もこの段階に含まれられる。

加曾利E式土器についてみれば、「V」字状文や「W」字状文、さらに渦巻状のモチーフなどの組み合わせによる文様が構成されるもの、あるいは、幅広の縄文帶と無文帶との繰り返しにより胸部を縱位に分割するものなどになる。29・31のような両耳広口壺も重要な器種である。ここで図示した資料の中にはやや新しい要素を備えたものも含まれるが、遺構外出土拓影図に示すように本段階全般にわたる上器の出土をみている。また、遺構の位置関係から25号住との時間差が想定される28・29号住出土土器や遺構外出土の第80図73・74など、より後出的な一群の存在も認められる。後期初頭土器群との関係など、複雑な問題を内包していることや資料的な制約から、今回は段階設定を見送った。尚、13号住及び25号住の覆土中からは、称名寺I式土器の小破片が出土している（第30図5・6、第46図5）。文様は沈線により描出されるものが多数を占めるものの、隆帶ないし隆起線によるものも少なからず出土している。

本段階に作る唐草文系土器の確実な資料はきわめて乏しく、わずかに5号住上部より得られたもの（第15図7～12）などがあるにすぎない。遺構外より出土した第86図180～188などは、破片に限られ段階としての分離は困難ではあるが、本段階もしくは前段階に伴うと考えてよかろう。いずれにしても、前段階に現われた加曾利E式土器の優位性は本段階において絶対的なものとな

り、唐草文系土器はその存在すら危うくなる。

町内既出の31は圧痕隆帯文系の両耳壺と考えられる。同じく32は圧痕隆帯文系土器と唐草文系土器との折衷的な土器であり、地文に唐草文系の特徴を、文様に圧痕隆帯文系の特徴をそれぞれ共有している。類似例は28号土坑出土土器に認められ、加曾利E式土器と共に伴っている。先の殿村遺跡においては加曾利E式土器が折衷化の対象であったのに対し、本例は唐草文系土器がその対象となっており、唐草文系土器分布圏における地域的・地縁的差異として、その外縁部の様相を端的に示している。そして、それは常に加曾利E式土器や他の土器群の影響を受け続けた本遺跡・本地域において、唐草文系土器分布圏の一角を担った集団が、中期終末期の否定的な動勢と新たな胎動の中で選択した“生”への挑戦と自らの高揚を顕現化させた姿の一つと見ることもできよう。

以上、各段階の内容について述べた。冒頭にも記したようにこの段階区分は、あくまでも本遺跡でのあり方を主に注目したものであり、これが直ちに東信地方あるいはより広汎な地域に普遍化しうる体裁を整えたものではない。にもかかわらずあえて段階設定を試みたのは、従来土器型式の中に埋没しがちであった各遺跡における時空的変化・変遷を、遺跡という単位で抽出し、かつ個別化したかったからである。その点でこれは殿村遺跡での試行的作業を継承したものと言える。遺跡とそれを造した集団・人を大切に見つめることこそ、膨大な数の遺跡が失われつつある現在最も重要なことと思われる。また逆に、こうした作業の積み重ねは、上記の一般化を帰納的に行うまでの有効な方向性であろう。遺跡や遺物の分類による同一化とは別に、それらの差異化という面にも視点を向けておきたい。

(百瀬 忠幸)

#### 参考文献

- |              |  |
|--------------|--|
| 鶴田弘実         | 1989 「長野県東北信地方の中期末葉の土器群」<br>『縄文中期の諸問題』 群馬県考古学研究所 |
| "            | 1983 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』17           |
| 谷井 雄         | 1982 「縄文中期土器の再編」「研究紀要」 勝崎工場埋蔵文化財調査事業団            |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書」                     |
| 百瀬忠幸他        | 1987 「殿村遺跡」 山形村教育委員会                             |
| 児玉卓文         | 1982 「真行寺」 東郷町教育委員会                              |
| "            | 1983 「六反田」 長門町教育委員会                              |
| "            | 1984 「中道」 "                                      |

## 付 資料紹介

ここで紹介する資料は、真田町教育委員会に寄贈されたものと真田中学校が所蔵しているものである。出土地点が不明なものも含まれるが、すべては四日市遺跡を含む真田町内の平野部に営まれた遺跡から出土した遺物である。これらは皆、未だ世に紹介されたことのない、言わば「埋もれた資料」であるが、本報告書の刊行を機にここで紹介する。

### 1 中村遺跡出土遺物（第119図-1・2）

真田町傍陽に所在する遺跡である。昭和47年、真田町農協傍陽支所（旧傍陽農協）の建物建設の際に出土した縄文土器2個体が、教育委員会に寄贈されている。出土状況は不明である。

1は口径26.4cm、現存高24.6cmを測る深鉢形土器。4単位の山形突起を有し、口縁下を無文帶として残す。2は器高31.6cmの両耳壺。肩部に圧痕縦帯文をめぐらす。ともに中期後葉の所産であり、また遺存状況から遺構内に埋設されてあった土器の可能性が極めて高い。

### 2 竹室遺跡出土遺物（第119図-3）

真田町本原竹室に所在する遺跡である。昭和43年に表採された縄文土器1個体が教育委員会に寄贈されている。

これは口径23.3cm、現存高28.6cmを測る唐草文系土器である。胴中・上部には綾杉状の短沈線を地文として施し、胴下部を状線で埋めている。中期後葉に位置づく。これも遺存状況から察して屋内埋藏であった可能性が考えられる。

### 3 真田中学校所蔵遺物（第120~124図）

昭和30年、校舎建設の際出土したものと、昭和37年に付近から表採された遺物が一括して所蔵されている。校舎が四日市遺跡に隣接していることから、校舎建設時に出土したものは本遺跡の遺物に間違いなかろうが、表採遺物と混在しているため、個々における出土遺跡の把握は不可能である。縄文時代中期後葉を中心とした土器・石器を多量に所蔵しているが、ここではその中の主だった縄文土器だけを紹介する。

1は前期前半、黒浜式土器の口縁部破片。2~5は前期後半、諸磯式土器。2・3は連続爪形文、4・5はキザミのある張付細隆線により文様が構成される。2はキザミのある張付隆線を併用している。

6~15は藤内式をはじめとする中期前葉~中葉の土器。内、12は焼町系土器、13・14は北陸地方の上器、15は阿玉台式上器である。

16~31は中期後葉の上器。16~18は唐草文系土器に伴う把手を因化したもの。同土器群の中で

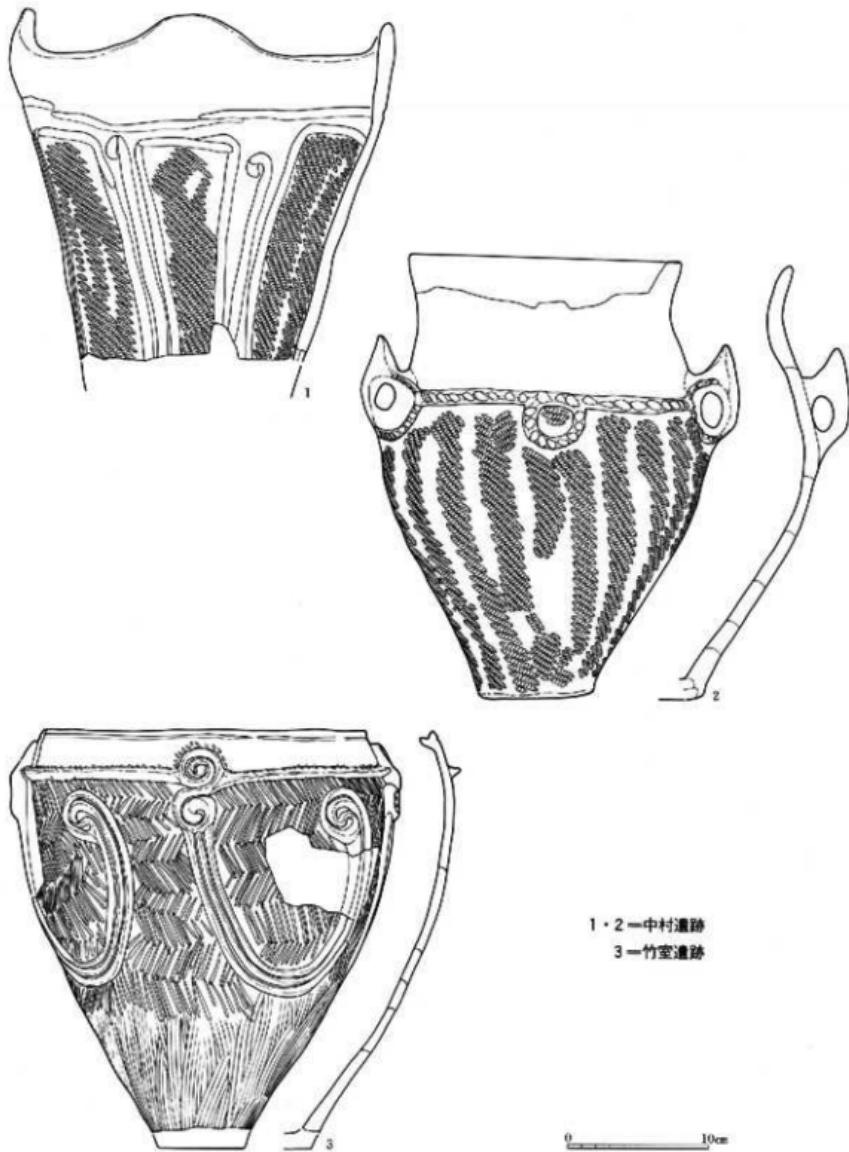
も古い段階に位置づけられよう。20は口縁部文様帯を残す加曾利E式（系）土器であり、口径推定27.3cmを測る。22は細陥起線によりモチーフを構成する加曾利E式終末期の上器であるが、やや特殊な器形を呈するものかもしれない。23も加曾利E式（系）土器。「U」字状及び楕円状の文様が組み合わされるものの、単純な反復構成を示さない。24は加曾利E式土器と唐草文系土器との折衷的な在地土器。文様構成においては加曾利E式土器の要素をもちつつも、地文には短沈線や刺突文、さらに条線文が施される。25は唐草文系土器の範疇で捉えてよい土器であろう。26～30は唐草文系土器。そのうち27～30は同一個体と思われ、櫛齒状工具による波状ないし鱗状の地文を併せもつ特徴的な土器である。本報告の四日市遺跡でも類例が出土しており、東信地方西部に分布する在地性の強い土器と考えられる。31は圧痕隆帶文系土器の文様要素を取り入れた唐草文系土器といえる。口縁下に圧痕隆帶文をめぐらせ、胴部には雨垂れ状の短沈線を地文として、5単位の独立した懸垂文を有する。

#### 4 北番匠日遺跡出土遺物（第125図）

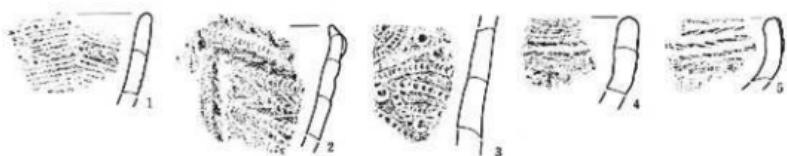
真出町本原に所在する遺跡である。昭和47年、住宅建築の際出土した古墳時代後期後半の土器が教育委員会に寄贈されている。約16坪を深さ1m～1m50cm程掘り下げたというが、これらは狭い範囲から圓まって出土している。特に壺は、まわり四方を石で囲んだ中に10数枚が重なって出土したという。石も寄贈されているが、長さ20cm内外の細長い自然礫であった。今に残るのは図示したものだけに限られるが、壺や大形の土器（甕・壺の類か）の何点かは既に人手に渡ってしまい、その所在がわからぬでいる。これらの土器は、何らかの造構に帰属したものと考えられるが、その性格は知る由もない。だが、いずれにせよ一括性の高い土器群であることに違いなく、当該地方の良好な資料のひとつに數えられよう。



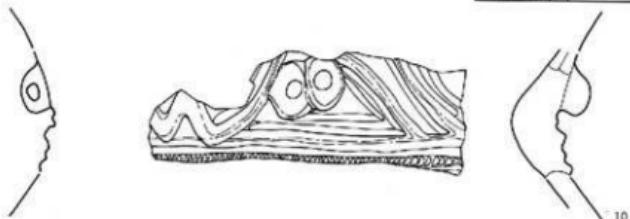
第118図 遺物出土地点



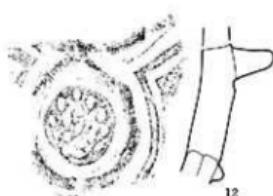
第119図 中村遺跡・竹室遺跡出土遺物実測図



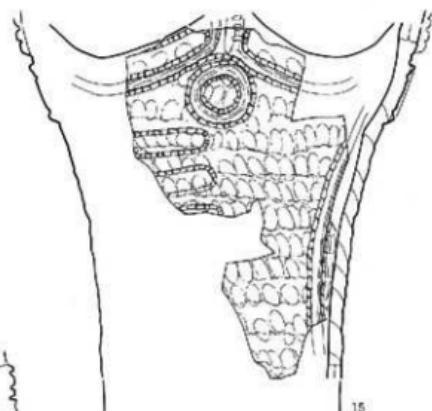
0 10cm



0 10cm

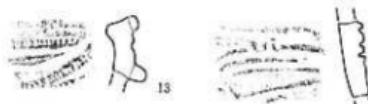


12



15

0 10cm

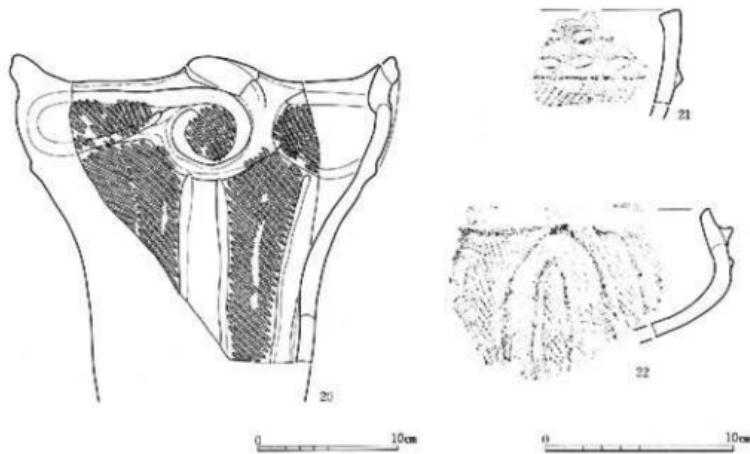
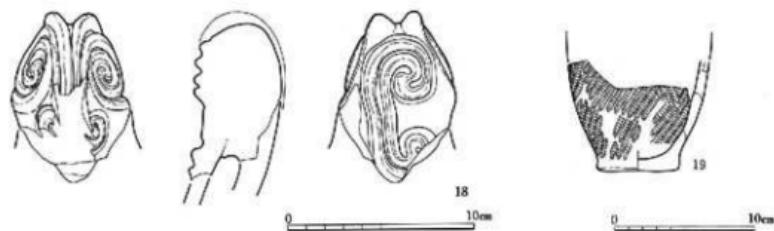
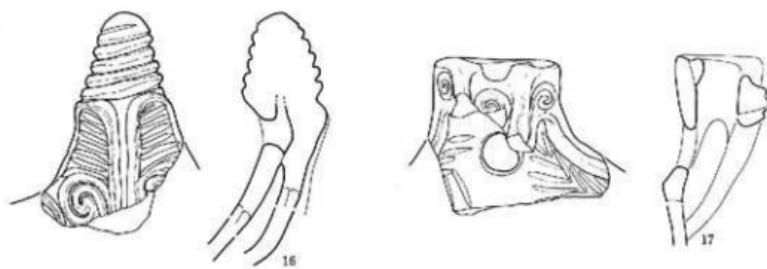


13

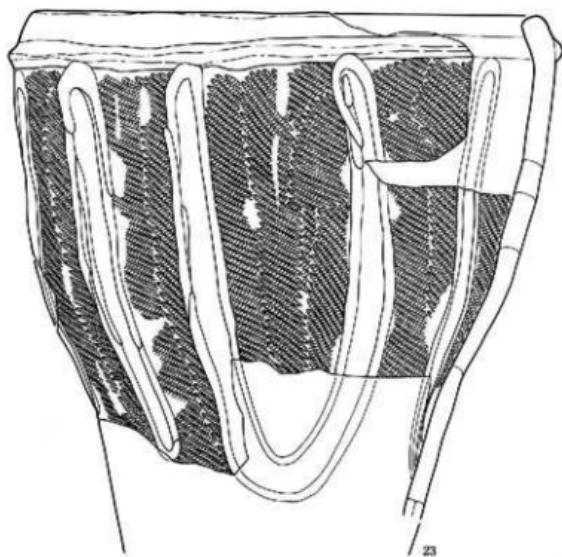
14

0 10cm

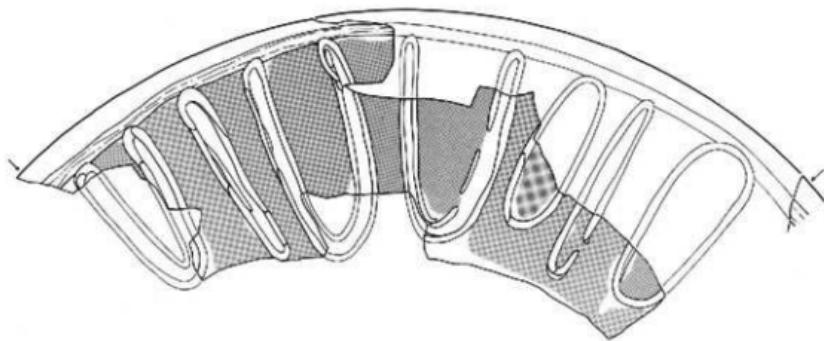
第120図 真田中学校所蔵遺物実測図及び拓影(1)



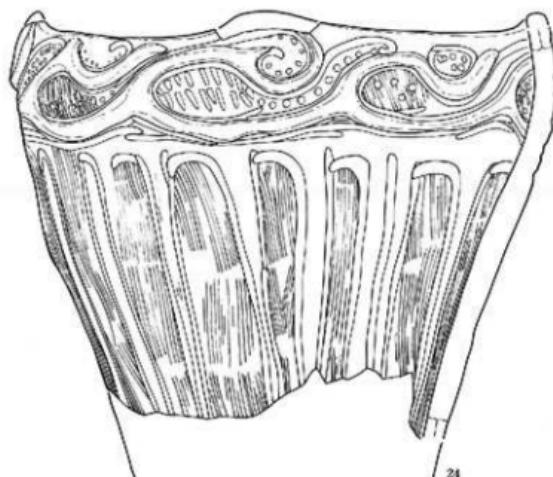
第121図 真田中学校所蔵遺物実測図及び拓影(2)



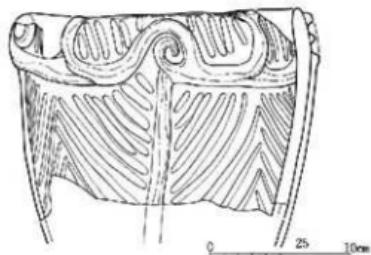
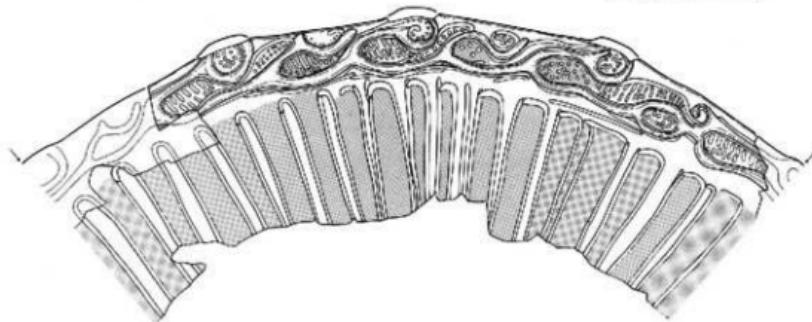
0 10cm



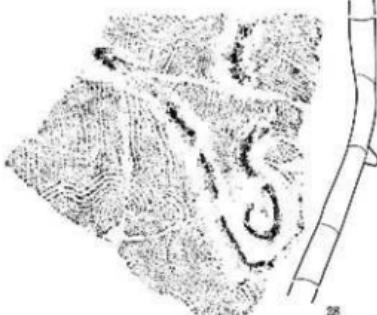
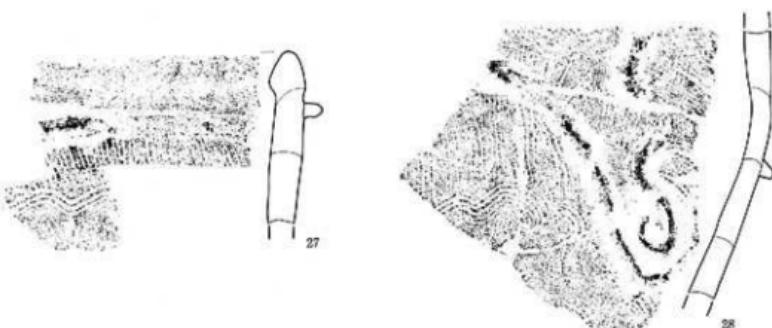
第122図 真田中学校所蔵遺物実測図(3)



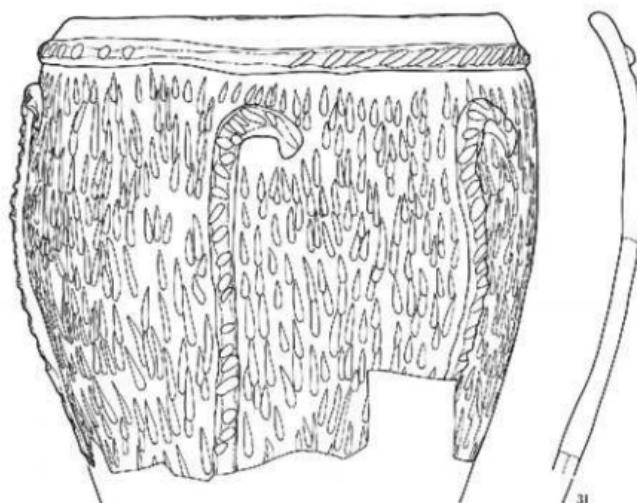
0 10cm



第123図 真田中学校所蔵遺物実測図及び拓影(4)

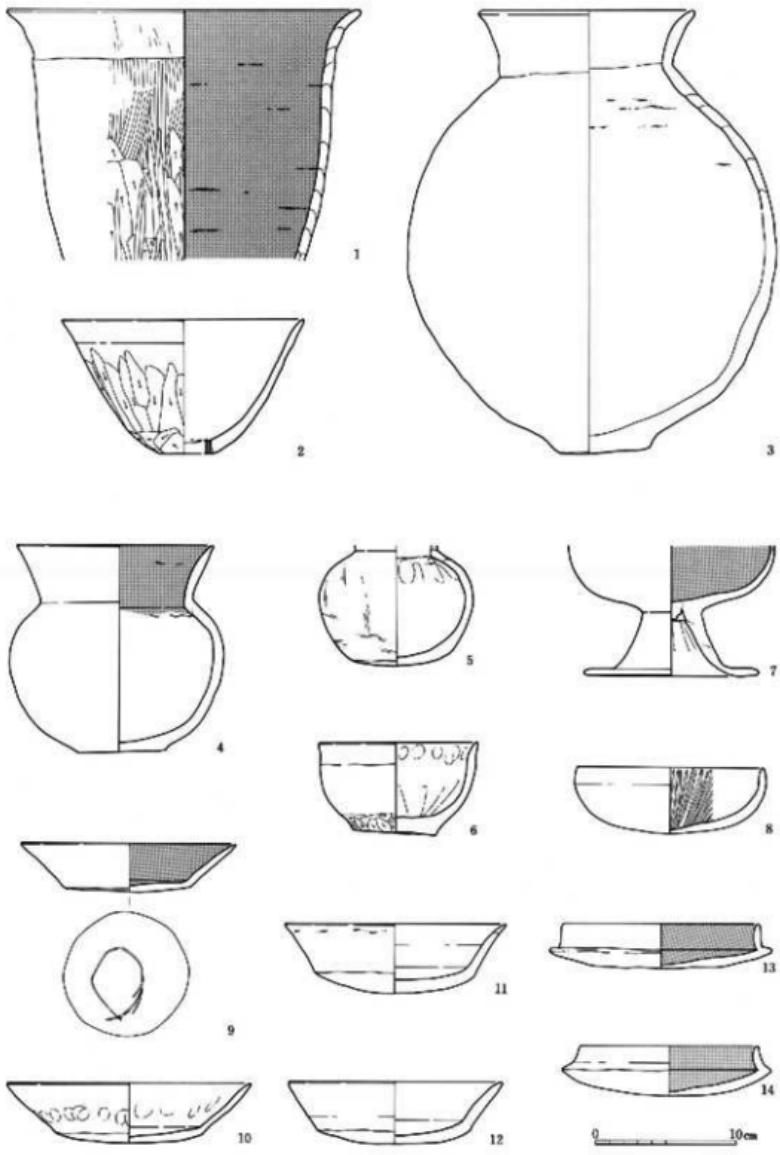


0 10cm



0 10cm

第124図 真田中学校所蔵遺物実測図及び拓影(5)

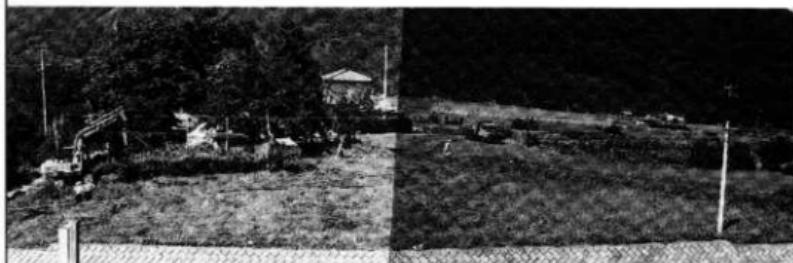


第125図 北番匠B遺跡出土遺物実測図

PL1

調査区全景（西より）

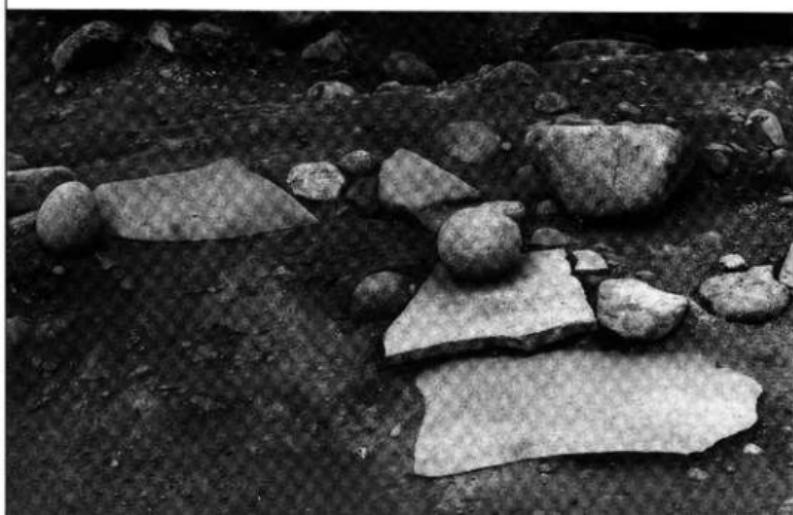




1. 調査区全景  
(調査前、東より)

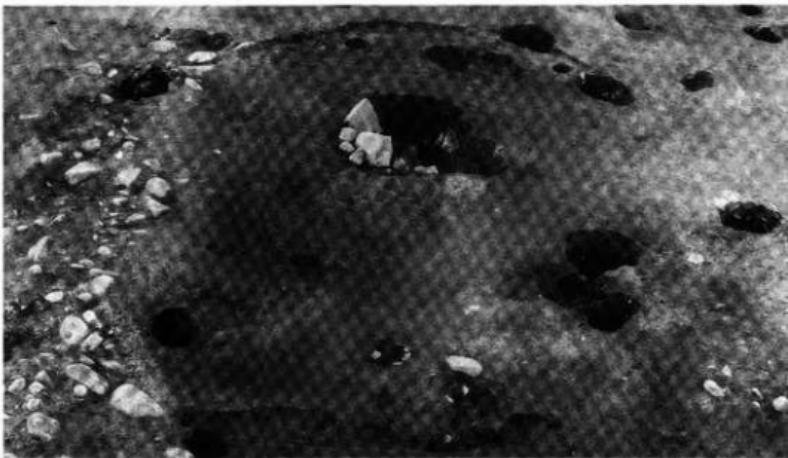


2. 表土剥ぎ後の状況  
(調査区北端)

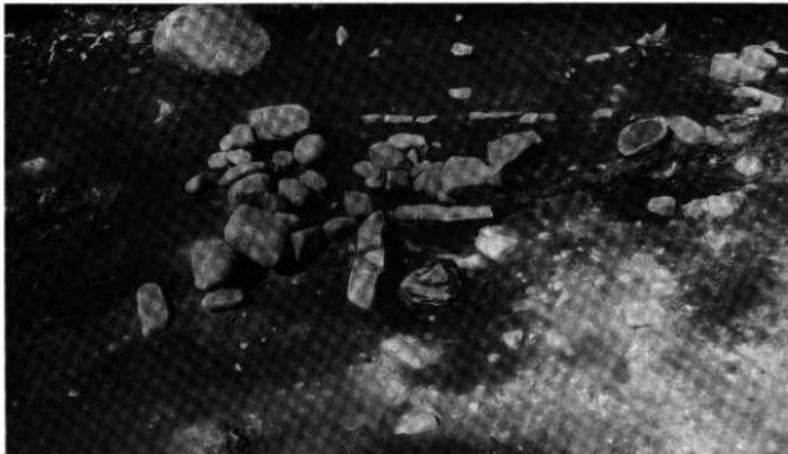


3. 5号住居址敷石状態

1. 6号住居址

2. 同炉  
3. 同埋甕

4. 8号住居址



1. 8号住居址炉



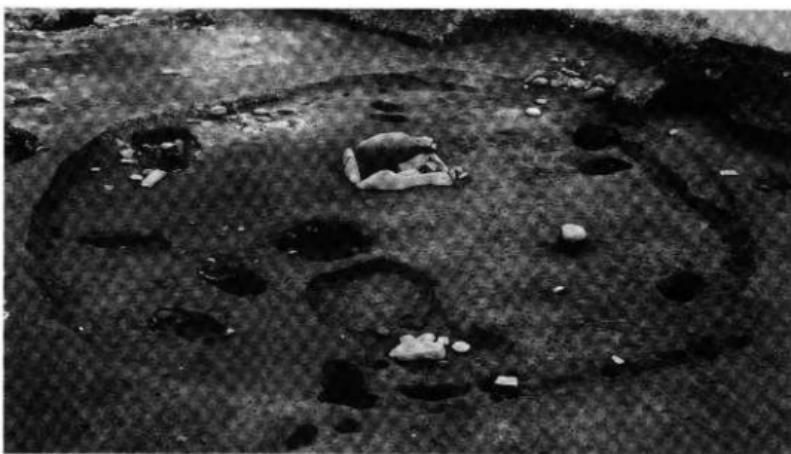
2. 13号住居址



3. 19号住居址



1. 23号住居址



2. 同炉



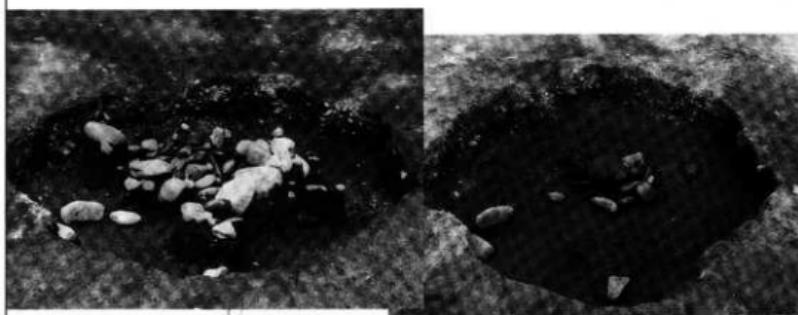
3・4. 同堆棗



1. 53·54号土坑



2. 51号土坑  
3. 同坑底施設



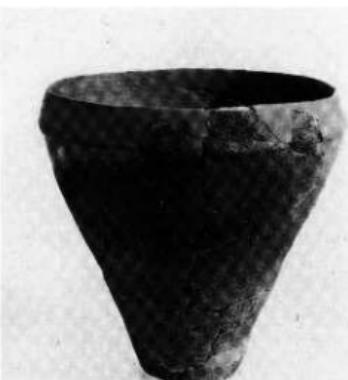
4. 同内土器出土状態



1. 5号住埋甕  
2. 8号住出土器



1



2

3. 12号住出土土器  
4. 19号住埋甕



3



4

5. 23号住埋甕B  
6. 同 A



5



6



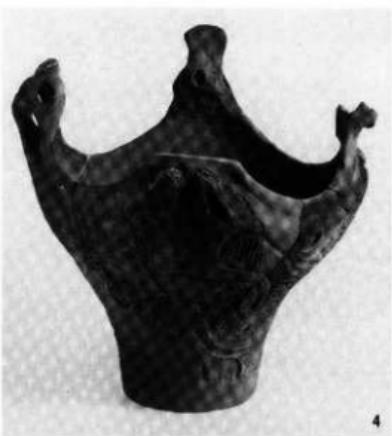
1



2



3



4



5



6

1. 24号住堆罐  
2. 25号住堆甌

3. 1号土坑出土土器  
4. 14号土坑出土土器

5. 44号土坑出土土器  
6. 51号出土土器

1. 54号土坑出土土器



1

2. 遗构外出土土器



2

3. 45号土坑出土土器



3

4. 3号埋甕



4



5



1



2



3



4



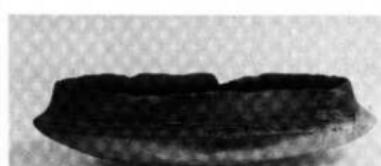
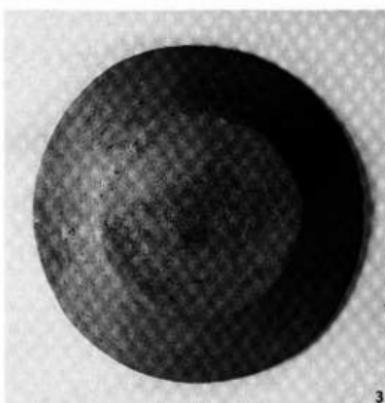
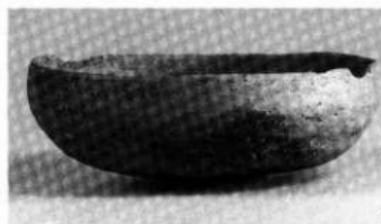
5

1・2. 中村遺跡出土  
土器

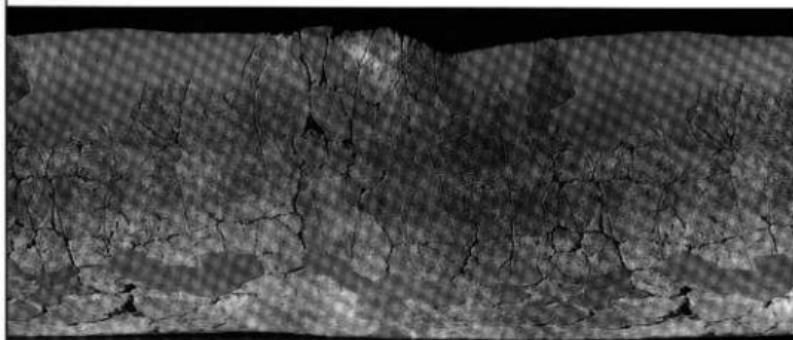
3. 竹室遺跡出土土器  
4. 真田中学校所藏土器

5. 真田中学校所藏土器

1 ~ 6. 北番匠  
B 遺跡出土土器



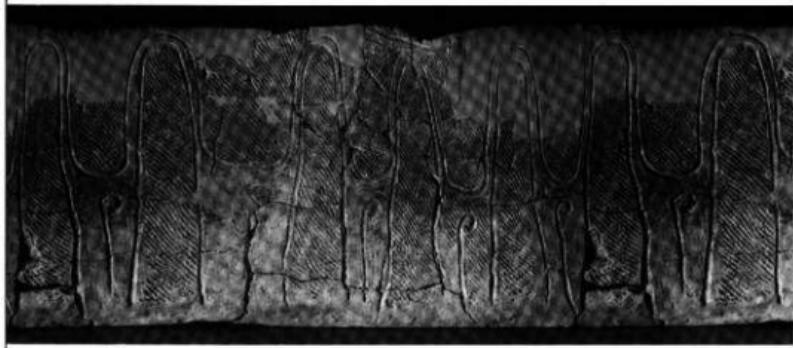
1. 5号住埋處



2. 6号住埋處



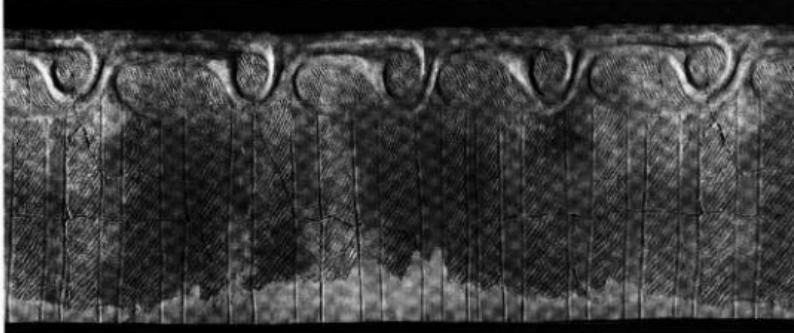
3. 19号住埋處



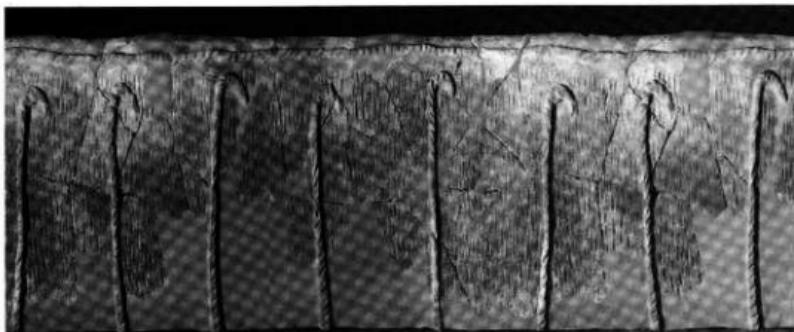
4. 23号住埋處B



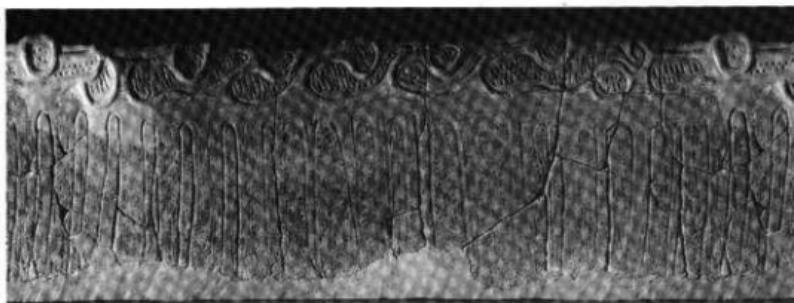
5. 23号住埋甕A



6. 真田中学校所藏土器



7. 真田中学校所藏土器



---

---

長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書

四日市遺跡

平成2年3月31日発行

編集  
発行

真田町教育委員会

印刷

株 中信社 佐久市岩村田1154-8  
TEL. 0267-67-2152

---